八幡特集

春の雪舞い散る

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

やっぱり失敗のない告白をしたい戸部の甘い考えは間違っていたの世界の八幡の誕生日ＳＳ集です

あくまでも各々のヒロイン達が各々に八幡との距離を縮めていくため互いの話しは矛盾しますが一人一人の話しは続編みたいに繋がりを持たせたいです

ルートの付かない物は別ですが…

因みに誕生日ルートにはるのんルートがないのは外伝です、既にシリーズ化で書き進めて居るのだからです

目次

八幡の誕生日編
八幡の誕生日、優美子ルート編 ― 1
八幡の誕生日、坂月彩月ルート編 ― 4
八幡の誕生日、比企谷八重、戸塚彩加編① ― 6
八幡の誕生日、相模南ルート編 ― 9
八幡の誕生日、一色いろはルート編 ― 11
八幡の誕生日、沙希ルート編 ― 13
八幡の誕生日、小町ルート編 ― 16
八幡の誕生日、鶴見留美ルート編 ― 18
八幡の誕生日、金居可南子ルート編 ― 20
八幡の誕生日、比企谷八重、戸塚彩加編② ― 22
八幡の誕生日姫菜×戸部＋（大岡＋大和）編 ― 24
八幡の誕生日、城廻めぐりルート編 ― 26
八幡の誕生日、三河香保里ルート編 ― 28
八幡の誕生日、姫菜×戸部＋（大岡＋大和）編② ― 30
中秋の名月を貴方と共に
中秋の名月貴方と共に―三河香保里ルート編 ― 32
中秋の名月を貴方と共に…一色いろはルート編 ― 35
中秋の名月を貴方と共に…比企谷小町＆鶴見留美ルート編 ― 38
中秋の名月を貴方と共に…三浦優美子ルート編 ― 40
中秋の名月貴方と共に―坂月彩月編 ― 42
中秋の名月を貴方と共に…金居可南子ルート編 ― 45
中秋の名月を貴方と共に…川崎沙希ルート編 ― 51
中秋の名月を貴方と共に…相模南ルート編 ― 53

中秋の名月を貴方と共に…城廻めぐりルート編 ―――― 56
三河香保里特別ルート、妹がライバル～中学校の体育祭 ―― 59
初めてのデートは妹達と一緒に… ―――― 63
運動会に八幡がきた～三河香保里特別ルート編 ―――― 67
トリック・ア・トリート…お菓子くれないとイタズラしちゃうぞ？～はーちゃん、けーちゃんのお兄ちゃんになってよっ!?けーちゃん編 ―――― 69
トリック・ア・トリート…お菓子くれないとイタズラしちゃうぞ？…私が彼にしたいイタズラ～ルミルミ編 ―――― 72
トリック・ア・トリアート…小町のお願い聞いてよお兄ちゃん～小町編 ―――― 75
バレンタインデーキス ―――― 78

八幡の誕生日編

八幡の誕生日、優美子ルート編

優美子ルート

「はぁ～っ…ねみぃな」

結局夕べも徹夜に近い俺は確か六時位まで勉強してたんだよな…

焼きたてのトーストにマーガリンとジャムを塗りかじりながらハムエッグを焼いている

今日は夕べ遅くに優美子から

「たまには勉強を忘れてあーしの買い物に付き合えしっ！」

と、連絡があり出掛ける支度をしている？

「未だに女子と一対一で出掛けるのって慣れねぇんだよな…」

食い終えた俺が一人歯を磨いてたら起きてきた小町が

「およ…珍しく朝早くから行動してるお兄ちゃん、小町的にポイント高いよっ♪」

そう話し掛けてくる小町だがその一言が無ければ良かったんだがな？小町よ

「トーストにハムエッグを焼けば良いな？」

そう言って温め直したスープと共にテーブルに並べると

「あ～っ、わりいけど俺もう出掛けるから洗いモン頼むわ」

そう言って待ち合わせ場所であるららぽに向かった

ららぽに着いた俺は待ち合わせ場所である本屋に向かうと取り敢えず問題集のコーナーへと向かい過去問の問題集を手に取り吟味していれあた

今使ってるやつは丸暗記してしまい問題集の役割を果たしてないからだ

しばらく時間を忘れ真剣に吟味してたら

「あーしが言った言葉忘れてんの？勉強の事は忘れろって言ったしぃっ！」

そう言って睨む優美子に
「あぁ、そうだったな…今は良いんだが一人でいるときはついつい頭がそっちにいっちまうんだよな…」
そう言ってがしがしと頭を掻きながら苦笑いする俺に
「八幡は朝食ってきたん？」
そう聞いてきたから
「あぁ、ちゃんと小町の分も用意してな…とは言え食ったのが六時だから小腹は空いている状態ではあるだが？」
そう答えると一度ハイライトオフになりかけた瞳に光が戻り
「ならあーしの用意したサンドイッチで良ければ…」
と、普段の優美子からは想像できないようなか細い声で最後の方が聞き取れ無かったが
「どこで食うんだ？飲み物は買った方が良いのか？」
俺がそう聞くと
「フードコートで良いんじゃね？」
そう答える優美子
に俺も
「んじゃ飲み物くらいはフードコートの店で調達するか…
俺はアイスティーにするけど優美子は何にする？」
俺がそう聞くと
「アイスのレモンティー」
そう答えた優美子買ってきたレモンティーを渡し俺はミルクティーを飲みながら優美子の作ってきてくれたサンドイッチを頬張ることにした
もちろんサンドイッチの具にトマトが使われてないことに安心したことはゆーまでもないがな
そう内心思っていたら
「あんたのトマトキライもブレないね？アンだけ小町や彩加に沙希とうるさがた三人から言われてってゆーのにさ」
呆れて言う優美子に
「おう、そこは俺のアイデンティティに関わる所だからな、マッカン

と共に譲るきはねえな」
そう言って笑うと
再び溜め息を吐かれた
その後優美子のオススメのシャツとチノパンを買い優美子の服を見てから昼飯になりサイゼリヤで食ってたら迎えがきた
今日の夜は親父の友人がやってる海の家でパーティーをして夜はペンションが数部屋取ってあるそうだが俺の誕生日に合わせて予約を取っていたらしい

八幡の誕生日、坂月彩月ルート編

坂月彩月ルート
えーっとやはり不味いですよね？彼に対するこの思いは…
出会いから未だ半年にも満たない年下の…ましてや教え子の高校生相手に恋するなんて不味いにも程があるでしょ？
確かに彼は素敵な男性ですから好意を持ってしまうのは仕方ないにしてもせめて彼がこの学校を卒業するまではこの気持ちは隠さないとダメですよね？
私はそう覚悟を決めると
出会いから四ヶ月の彼との出会いを思い出しながら彼へのプレゼントを探している
慣れない教師生活に加えて初めての独り暮し…
仕事覚えるのでいっぱいいっぱいな私は食事を用意することすら忘れることもしばしばあり大抵カップ麺で済ませていたしその時も時間ギリギリにカップ麺を啜っていた
そんな私の食生活を知り呆れた彼が
「そんな生活ダメに決まってるだろ、先生っ！」
そう言った翌日から朝ご飯用のおにぎりとインスタントの味噌汁お昼ご飯のお弁当をこっそり渡してくれるようになり涙を流しながら美味しいご飯を食べたがそのお弁当が実は彼のお母様が作られたわけじゃなく
彼の手作りだと知りそれまでとは異なる涙を流したのも今では懐かしい思い出になっている

私が知らない行事に戸惑っているといつでも優しく救いの手を差し伸べてくれる…そんな優しい彼に好意を寄せるようになったのはいつからだろうか？
特に依頼が無い時はパソコンのお悩み相談に寄せられている質問に回答しているが…

『まさか私も知っていたあのお悩みサイトで答えている彼が私の目の前に現れ私教え子（実際には八幡の教科担任はしてません）になる日が来ようとは夢にも思ってませんでした』

私の友人にも『彼』のファンは少なくなく正月のあの活躍で顔写真が載った時は皆喜んでその新聞を買ったもので私の総武赴任を皆やっかんだものだ

そんな私が日頃の無理が祟り寝込む嵌めになった連休翌週の週末

職員室の机で突っ伏して熱で唸っていた私を自宅まで運び（当然彼は私のアパートの住所は知らないし私も話せる状態でなかったので）金、土、日の三日間を付きっきりで看病してくれまして…

ええ、惚れました…惚れちゃいましたとも、イケマセンカっ！

私だってこの思いは彼が卒業するまでは封印しますけど好きな気持ちに嘘はないつもりです

まぁ、看病の際は妹さんの比企谷小町さんのにも色々お世話になりましたけどね

以来、お礼もしたいからと夕飯に誘うと彼は必ず溜め息を吐き

「独り暮し初めてなんだから無駄遣いしないの、その気があるなら俺が晩ご飯用意しますから食材の負担は先生にお任せしても良いっすか？」

そう言ってくれて二人で買い物をしていきましたけどよくよく考えると若夫婦っぽくて思い切り照れ臭い事してたことに気付きました

明日の彼の誕生日に何を贈るべきか、それが今の私の最大の問題です

八幡の誕生日、比企谷八重、戸塚彩加編①

八重、彩加

その朝もいつもと変わらず早朝テニスを楽しんだアタシと彩加だけどやっぱりアタシの誕生日なのにってきにしてるから

「良いんだよ、アタシはこうやって彩加がアタシの側に居てくれるのが幸せなんだから

それにこんな風に純粋にテニスを楽しめる時間ってのは限られてるんだよ？」

アタシにそう言われて不服顔をする彩加に

「背が伸びて筋力が向上しスキルアップしてきてる彩加の相手が務まる時間はそんなに残ってないしアタシがいつまでも相手が勤まってちゃダメなんだよ」

アタシがそう諭すと

「じゃあ僕の方が八重ちゃんのコーチをする日がくるかもしれないってこと？」

そう言われて

「理論は簡単には譲らないけど言ってみれば実技に関しては時間の問題じゃないのかな？」

そうアタシが答えると一瞬地面が揺れた

ー地震？ー

その二文字が頭に過ったけどアタシのＰＨＳも彩加のスマホも沈黙したままで何も言わないのがおかしかった

そう、地震ならあるはずの地震速報が無いのは明らかにおかしかった

そんなアタシ達の前に一台の車が止まりアタシ達の前に降り立った人物を見てアタシ達は驚愕した

「八…なんでアンタが…それに陽乃さん？」

恐る恐るって感じでそう声を掛けると

「そう言うお前は小町…に、似た小学生と彩加によく似た…『ドガっ！』「誰が小学生だ、こらっ？こー見えてもアタシは今日１７になった

ばっかのＪＫだ、バカにすんな」」
八によく似たソイツの向こう脛に蹴りをぶちこ見そう言い捨てると苦笑いの彩加が
「僕は戸塚彩加、総武高の二年です」
そう言って頭を下げるからアタシも仕方無く
「比企谷八重、同じく総武の二年だ」
そう名乗ると
「比企谷八幡、総武の三Ｊ所属だ…」
「私は雪ノ下陽乃…Ｔ大三回生だよ、知ってるよね？別の世界の比企谷君」
そう言われて
「やっぱそーゆー展開かよ…」
そう言って二人を眺めて
「そっか…ＴＳしなかったら陽乃さん選んでたのか…結衣や雪乃じゃなくて…」
そう言って考え込むと
「そうゆーお前は彩加か、さすが俺だな男を見る目があるぞ」
そんなアホなことを言うから
「そうゆー姫菜が喜びそうなネタは勘弁してくれ…」
そう言ったら
「腐女子は健在か…」
八がそうゆーから
「姫菜がんな簡単に変わるかよ？」
そうアタシが聞き返したら
「変わってほしい…だな？まぁ、腐女子じゃない海老名さんも中々想像できんがな…」
そう言われて二人して溜め息を吐いて
「だよなぁ～、姫菜のアイデンティティーだからな…そんな簡単に変わるわけ無いよな？隼人に言い寄られてるアタシを見てはや×八キマシタ～って叫んで赤い噴水上げてるんだよ？
あれは絶対に脳内で八と入れ換えてるよ」

そう言って苦笑いを浮かべると
「まぁ、確かにな…俺にも容易に創造できちまってほれ、鳥肌もんよ…」
と、言って一個上の八も乾いた笑い声をあげていた

八幡の誕生日、相模南ルート編

相模ルート

修学旅行を目前に控えていたあの日の騒ぎを境に一切の信頼を失ってしまった隼人君が落ちぶれ始めるとそれまでは人目に触れることの無かった彼の粗が見え始めた

その粗には当然のようにうちの事も含まれてて文実の実行委員長になりながら実質的には何もしないで雪ノ下さんに仕事を押し付けるつもりが気が付いた時には名ばかりの委員長になってて

更には調子の良い言葉に踊らされたうちがさらに墓穴を堀続けた挙げ句に下手したら文化祭に汚点を残しかねない事をしでかしたうち

そんなうちが何ら責められることなく済んだのは全ての悪意や敵意を比企谷が引き受けてくれたお陰だからだ

だけどそんな事にすらも気付かないうちは全く懲りるどころか敵意を向けまくっていたのだけど隼人君の失墜は常に彼を引き合いに貶めていた比企谷に対する見方も代わり

その過程でうちの旧悪が露呈すると人々はうちに対して掌を返し悪意や敵意が見え始めた

それでも平塚先生がいた三月までは未だよかったけど四月から海浜へ転任してしまい庇護者を失ったあうちは惨めだった

もちろんもう奉仕部に頼ると言う選択肢はもうとれない

結衣と平塚先生が居なくなってしまった現行の奉仕部にはあたしに友好的な人物が居ないのだから仕方無い

自業自得だって言われてしまったたら返す言葉もなんか一言も無いのはわかってるんだけど

私にだって…イヤ、何を言ってみたところで所詮は言い訳にすぎないのだからやめておく

端から奉仕部に仕事を押し付けるつもりが逆に自分の立場を亡くし恥の上塗りを重ねた結果が今の立場に追い込まれてるんだから笑えない

どこからやり直したら良いのか?それすら全くわからない
何だかんだと言って比企谷が…比企谷だけがアタシを守っていてくれていたのにそれすら気付かす何もしてない隼人君に感謝していてんだからお粗末すぎた
だから今更ながら…いや、失敗を自覚できた今だからこそ願う
比企谷との関係をリセットしたい、仲良くなんて図々しいことをいきなり望んだりもしない
まずはアイツの進路希望が知りたい…
センター試験受けるアイツと同じ大学は難しいかもしんないけどキャンバスの外でばったり会えるくらいには近い大学に行けたらと思っている
それくらいなら望んだりしても許してほしいから
そう言えば明日は比企谷の誕生日だって噂を小耳に挟んだけど町中で偶然出会えたりしないだろうか?
そんな妄想染みた事を考えていたりもする
謝罪もできてない今はいきなり会っても何を言えばいいのかわからないのにだ…
あ、比企谷が一人で図書館に入っていく…
そう思ったうちは慌てて比企谷を追って図書館に向かって駆け出した…

終わり

八幡の誕生日、一色いろはルート編

一色いろはルート

（よし、これならきっと先輩達にだって負けてないよね？）

あたしと先輩じゃ学年が違うしましてやクラスメイトの沙希先輩や優美子先輩達に比べたら背負うハンディキャップが大きすぎる

先輩の妹さんの小町ちゃんに言わせると

「学年の違いは年下…つまり後輩であるいろは先輩に甘えられると弱いから強力な武器になるとも言えるんですよ？」

そう言ってくれていたからあたし的にもそれに掛けるしか無いと思う

いくら泣いたって後輩だって言う現実は変わらないんだからそう割りきるより他ないのだから

先輩の為に焼いたバースデーケーキとは別のマッカン風味クリーム味のケーキを用意するあたしは改めて気合いを入れ直すと鏡に向かってみた

「はるさん先輩や沙希先輩に優美子先輩と比べたらまだまだ子供っぽいし色々負けてるけどあたしにだって三人に勝ってるところのひとつや二つくらい有るよね？」

そう呟いてみる

この春先輩があたしの誕生日にくれたエプロンは先輩の手作りでデザインも自分で手掛けたって聞いてる

で、それ以降先輩に誕生日を教えてエプロンを作ってもらおうとする女子が奉仕部を訪れるのが今年の総武の女子のトレンドとまで言われている

凄いのかすごくないのか微妙な話ではあるけどあまり面白くない話であるのは確かな話

あたしが知ってる範囲では生徒会長の三河さんと書記ちゃん、家庭科クラブの金居先輩にはるさん先輩に姫菜先輩の五人だけが貰っている

それともう一人、戸塚先輩もいらっしゃいましたね…まぁ、この方は見た目はともかく男性ですから問題はないと思いますけど…実際のところはどうなんでしょうか？

しかしこうして改めて先輩の事を改めて考えてみると面倒臭がりで自分が着るのは嫌がる癖に結構センスは良いんですよね、服のチョイスとか…

そんな先輩が料理やお菓子作りに引き続き裁縫までこなすとかって先輩の女子力マジ半端ないですね

そう言えば先輩って小さいこの子の面倒見も良いんでしたよね……

ってそう考えたら先輩ってかなり理想的な結婚相手なんじゃないんだろうかって…今更ながら気付いちゃったんですけど…

そんな事を母さんと話していたらいきなり私の手を掴むと

「そんな人絶対に逃がしちゃダメよ、いろは…後悔しない、泣きを見ないためにもね」

そうあたしの目を見ながら何度もうなずいたっけ

で、その後の台詞が台無しで

「早く私の彼ですって連れてきなさいよっ！」

だって…それができるんならあたしだって一日も早くそうしたいよっ！そう言いたかったけど今は未だその時じゃないから皆との先輩の誕生日を祝う今を楽しもう…そう思ってパーティー会場に足を向けるのだった

八幡の誕生日、沙希ルート編

沙希ルート

同じ予備校に通い共に学び合う同志であり共に歩みたいと思っている女子、川崎沙希

現在進路志望校について検討中なんだ俺個人としては福祉学部系の学部のある大学に行こうかと考えている

図書館で勉強をしてけーちゃんのお迎えに来た俺はすっかり顔馴染みになったお母さん方と声を交わしながらけーちゃんの手を引いて川崎家へと向かう

「お兄ちゃん、沙希お義姉ちゃんは最近お疲れ気味なので今日はゆっくり帰ってきて欲しいのです」

そう小町に言われている俺はスーパーのイートインでけーちゃんにパフェを食べさせているところだ

勿論このスーパーの店員は勿論顔見知りの客の人も居るから中々静かにとはいかないがな

「帰りに一箱買っていくか…」

そう呟きながらけーちゃんを見守る俺は小町が晩飯は要らないと言ってたからサラスパにすることにした

面倒臭いのと食欲も今一であまり食いたいとも思わないだからだけーちゃんが食べ終わるのを待ち

アイスのファミリーパックとサラスパを取りレジで支払いを済ませクーラーバッグに入れてからけーちゃんを連れて川崎家に向かう

「たでーま」

そう言って川崎家に上がり込み冷凍庫にアイスをしまうと

「沙希～っ！風呂場洗っておくからくからけーちゃん早めに入れておけよぉ～っ！」

そう声をかけるがなぜか返事がない

だから俺は肩を竦め風呂場に行き風呂桶を洗い後は湯を張るだけにしてけーちゃんとテレビを観ることにした…

と、言っても俺自身は見るともなしに眺めているだけなんだがな
今日は朝から小町が怪しげな動きを見せてたからな何か企んでは
いるんだろうがそう思ってたらけーちゃんを肩車した俺は沙希に手
を引かれ…
（たしかこの先にあるのは集会場だったよな？）

そう思いながら中に入るとクラッカーが鳴り響き
『『比企谷（君）』『八幡』「八くん」お誕生日おめてとう」
そう言われて
「は？俺の誕生日八月八日の昨日だったんだけど？」
呆気に取られた俺がそう答えると
一瞬の気まずい沈黙、特に小町の「しまったった！」
の表情の後に
「八月の九日の今日じゃやくて？」
そう聞かれ
「あぁ、申し訳ないがいが俺の誕生日は今日ではなく昨日だそ？
まぁ、今の今まですっかりわすれてた俺には祝ってくれる気持ちだけ
で十二分に有り難いがな？」
俺が沙希の頭を撫でながら
「それにな、誕生日だからって特別何かしなくてもだな…その…沙
希が作ってくれる飯が食えりゃそんだけで十分に幸せなんだぜ？」
そう言って笑いながら話ながら掛けると
「だ、だからと言って…」
そう言って泣きそうな沙希に
「ならまた今度蒼空とけーちゃんを連れて出掛けようぜ？弁当を
持ってな…な、けーちゃん」
そう俺に言われて
「ウン、又四人でお出掛けしよーね、さーちゃん」
「お出掛けしよーねはーちゃん」
けーちゃんと蒼空の二人にそう言われて沙希も
「あ、あんたがそれで良いって言ってくれるならね…」

沙希もそう答えると
「ん、ならみんなが用意してくれた料理一緒に食べるか？冷めたら勿体無いしな」
そう言って俺の一日間違われた誕生日パーティーが始まるのだった…

終わり

八幡の誕生日、小町ルート編

小町ルート

今日はお兄ちゃんの１８回目の誕生日でいままでに無い賑やかなパーティーになりそうで良かったです

ナニしろあのお兄ちゃんの誕生日を祝ってくれる人がたくさん集まってくれるんですからね…

去年はまだ二人っきりだった事を思うと感慨深いものがありますよ

やっとお兄ちゃんの事を理解してくれる人が現れたんだからね、小町はそれが嬉しくて仕方がないんだよ…お兄ちゃん

いつの間にかお料理のスキルを上げお兄ちゃんのご飯って結構知れ渡っちゃって

「お料理男子のお兄さんって羨ましいよね？」

って中学時代も学校や塾の友達にもよく羨まがられていたし今は毎日お兄ちゃんの手作りお弁当持って学校行ってるから尚更皆から

「羨ましい」

って特に女子の声が聞こえてくる

「彩り鮮やかでオシャレ」

「一手間が可愛い」

「食べやすそう」

「見た目から毎日蓋を開けるのが楽しみなお弁当」

等々お兄ちゃんのお弁当ファンが小町のお弁当の画像をナゼかｂｌｏｇに上げていて女子の間じゃ結構人気だって言われてます

最近は大志くんもお兄ちゃんの影響を受けて受験生の沙希さんに変わってご飯の支度とかするようになっているんだから人間変われば変わるもんだよね？

根はマジメで勤勉なお兄ちゃんがが作ったレシピ帳を見ながらお料理の勉強中なんだそうです

海浜との合同イベントも恒例化してきた感じで母の日には蒼空くんやけーちゃん達の様に低学年の子や保育園児も楽しめる手巻き寿

司パーティーを一例として紹介したし
父の日は１００円ショップでも売ってる餃子メーカーを使った変わり餃子パーティーを提唱し七夕はシンプルに短冊や笹飾りを作り…
ナゼか参加者の皆さんと流し素麺を楽しみました
ですから次の敬老の日、その次のハロウィン企画もかなりの人が期待しているそうであたしも楽しみにしてるんですよね
お兄ちゃんの人気は既に高校生の枠を越えちゃってますからね…
実際の話、最近は一人で放っておいたらすぐに女子大生やＯＬのお姉さんに逆ナンされてますから皆さん少しも目が離せないんですよ…お兄ちゃんから
だから今日の誕生日パーティーも最初は陽乃さんと前生徒会長の城廻先輩に沙希さんに大志君、優美子先輩にいろは先輩と金居先輩に姫菜先輩と戸部、大岡、大和の三先輩方だけだったのが…
気が付いたら校長も頂いて会場が体育館になっちゃってましたよ
参加者も学外の留美ちゃんや海浜の人達も集まってくれるんですからね…お兄ちゃんの誕生日を祝うために
小町の大好きなお兄ちゃんの為に…お兄ちゃん、お誕生日おめでとうっ♪

八幡の誕生日、鶴見留美ルート編

鶴見留美ルート
今日はあの人の１８回目の誕生日…
頭の良い切れ者で真実を見抜く目の持ち主
私を取り巻いていた難問をあっさり見抜き解放してくれたちょっとひねくれてるけど優しくて頼り甲斐の…普段はちょっとアレだけどね
今は未だ私も子供扱いしかしてもらえないけど私だっていつまでも子供じゃないんだから遠慮する気は更々無いんだからね
最後に八幡の手を取って笑うのは私、鶴見留美に決まってるんだからね覚えていてね、八幡
私、もう八幡しか見えないし興味ないから私が大人になるのを待っててね…お願いだから誰のものにらないでいていてね、八幡は私のものになるんだから
だから早く大人になりたい
大人になって八幡と一緒に歩きたいし同じ時を過ごしたい
あの二人はバカだと思う
詳しくは教えてもらってないけどその愚かさから八幡との未来を自ら壊しちゃったんだからどうしようもないと思う
でも、私には好都合だ最大のライバルだと思っていた雪乃とクラスメイトで部活仲間って言うもっとも有利なポジションにいた結衣の二人が自滅してくれたんだからね
そう自滅したんだから私にはもうなんの関係もない人達なんだろう…多分接点はないと思う
目下の最大のライバルだとあの雪乃の姉の陽乃と言う人だろう…
そう次が京華の姉の川崎沙希と言ったか？三年でもクラスメイトになり予備校も同じところに通ってるって聞いてる
そして三浦優美子…この人は千葉村で会ったときとは全くの別人って思う位に変わっているけど多分八幡が変えたんだろうな

八幡の影響を受けたんだって思う
もちろん何があったのかなんかは知らないけどあの優男の姿が見当たらないのと無関係ではないと思う
そして雪乃の達の自滅ともね…確か結衣の友達だったハズだから
私の知らない間に大きく変わった勢力図
私自身はどれくらいの位置に着けてるのだろうか？
今の私にできるのは八幡の邪魔にならないように八幡の事を見ながら勉強すること
私が頑張って勉強してれば
「解らんことがあったら聞きに来るんだぞ？」
そう優しく声を掛けてくれるし休憩、お昼ご飯にも誘ってくれるけど何を隠そう八幡の手作り弁当だよ
お母さんの帰りが遅くなる時何かは私の家で晩ご飯を作ってくれたりもしてくれてる
もちろんお母さんの分も用意してくれた
お母さんがいたけどお疲れモードの時があってその時は三人で食べた事もあったっけ？
その時はお母さんが物凄く喜んでいたっけ…もちろん私も嬉しかったけど幸せだったな…
今日はライバル達に負けないように頑張ろうと思う

八幡の誕生日、金居可南子ルート編

金居ルート

今日は比企谷君の…ううん、八幡くんの誕生日…

彼の周りに集まる（学内のトップレベルの）美少女達と比べたら魅力の乏しいジミっ娘の私に太刀打ちできる要素なんか全然見当たらない

唯一の取り柄、自信だった家事炊事も川崎さんがいるからはっきり言ってパッとしないんだよね…決して負けてないとは思うけど

それに引き換え比企谷君は頼れる皆の…大人の人からも信頼されてる凄い人なのに違う意味でエライエライと言っては笑いを取る人なんだよね…

だから私はせめてもの希望…彼の側に居たいと願う

彼の周りに集まるヒロイン達に比べたら取るに足らない端役の私でもそうありたいって願ってしまう

我儘言ってるのはわかってるけど一生に一度だけで良い、叶わなくても良いから今この時だけはこの夢を見続けていたい…

せめて彼が好きな誰かを選ぶその瞬間までは彼を思い続けていたいから…

そう私は願った、その日の訪れが一日でも遅くなるように…と

今しばらくはこの夢を見ていたいから

決して叶うこと無いだろう私の夢、私の初恋…私の王子様…比企谷八幡君…

その想いを一針一針に込め今仕上げの名前を刺繍している私の手作り作務衣

それが私から彼に贈るプレゼント

地味だけど着心地よく使い勝手が良いからきっと気に入ってくれるはず？

と、言うか喜んでくれると嬉しいんだけどな…

「さぁ、終わった…」

そう呟いて仕上がったばかりの作務衣を紙袋にしまい総武高に向

かう私は一色さんさんと共にケーキ班としてバースデーケーキを焼こう
彼の誕生日、彼をこの世に送り出し私達に出会わせてくれたご両親に感謝して…
今の私の想いを生地に込めて八幡君に届けたい

比企谷君が会場に呼ばれた
揉めに揉めた比企谷君のエスコート役は結局川崎さんの幼い弟君と妹ちゃんが選ばれた
つまり皆平等にチャンスを失った…って訳
まぁ、一番無難な結末と言いますかオチ？ですよね…
保育園児達が彼を囲み園で描いた彼似顔絵を得意気に渡しているし彼も嬉しそうにそれを受け取っている
その後が小学生の子達と彼の人気の程が伺える…本当に小さい子達からも慕われてるよね
でも…鶴見留美ちゃん、鶴見先生のお嬢さんであるアノ子は他の子とは八幡を見る目は全然違うね
アノ目は完全に恋する乙女が意中の異性に向けるめだよね？
皆さん、子供だからと油断していたら足元掬われますよ？
留美ちゃんだっていつまでも子供じゃないんだしそうなったら年下の若さは脅威となりますからね？

八幡の誕生日、比企谷八重、戸塚彩加編②

八重、彩加②

この先どうしたら良いのかわからないアタシと彩加はこの世界の年上の八とその恋人である陽乃さんと行動を共にすることにし

彩加は途中陽乃さんと立ち寄った紳士服の店でスーツをかってもらいアタシは綾波レイバージョンに着替えて八の１８才の誕生日に参加することになった

そして今

「お、お姉…ちゃん？」

アタシを見るなり声をつまらせる小町と呆然としているこっちの世界の親父と母ちゃんに

「さすが小町、よくぞアタシの正体見破ったな…

そう、アタシ等は異世界から紛れ込んだ比企谷八幡のＴＳした比企谷八重とその恋人の戸塚彩加だ

因みにアタシの八重と言う名を付けてくれたのはアタシの世界の小町だ」

「戸塚彩加です、よろしくお願いします」

そう言って頭を下げるアタシ達だけど泣きながらアタシに抱きつく小町に

「あーそういやこっちの世界の小町ってもう高１なんだよな？アタシは高２の誕生日にこっちの世界に飛ばされたから未だ二年生だからある意味ダブリみたいなもんかな？

学校どうするかはわからんが年で言ったらいろはとおんなじ二年なんだよな…」

って苦笑いを浮かべたら

「元の世界には戻れるの？」

そう真剣な顔で聞いてきた母ちゃんに向かって

「わからない…どうすれば良いのかさっぱりわからない」

そう答えると

「なら、こっちの世界にいる間は私達を両親だと思って甘えなさい

貴女もまた私達の子に違いないのだからね」
「幼い頃の小町が、無垢な天使が俺の元に帰ってきたっ！」
そう言ってしがみついてきやがったから母ちゃんにど突れやがったが
「大丈夫だよ、母ちゃん…アタシの世界の親父もこんな感じだから慣れてると言うかやっぱ親父なんだよなぁ～ってある意味安心したよ
それに母ちゃんの親父に対するその切れのある突っ込みもまんまだからな…」
そう笑って言うと
「で、相談なんだが俺はこの夏、陽乃さんと籍を入れ陽乃さんのマンションで同居するつもりだからあの部屋と物置部屋を開けて二人を住ませてやってくれないかな？」
今のこの二人には住むとこも帰る家もないわけだからな…
そう言ってアタシと彩加の肩を抱く八に
「おおさ、お前は要らん…八重ちゃんとチェンジだ、彩加君も可愛いから大歓迎だ『ごすっ…』」
「全く…わかったよ、陽乃さん八幡の事よろしくお願いしますね…」
そう言って親父を引き摺って会場に戻った母ちゃんの後ろ姿を見送るアタシ等だったけど
「良いのか？」
アタシがそう聞くと
「おう、今日から俺が兄だからな？だから千葉の兄妹なら当たり前なんだよっ…その妹の彼氏だからな…もう一人の彩加」
そう笑って言うからアタシも
「わかったよ、八幡兄さん…八兄だな？」
そう言ってアタシ達もパーティーに参加するする事になった

八幡の誕生日姫菜×戸部＋（大岡＋大和）編

姫菜、戸部、大岡、大和ルート

グループ崩壊後居場所を失っていた男子三人は元々それ程強い結束力を持っていたわけではなく呆気なくバラバラになっていたがバレンタインを切っ掛けはに優美子と和解し海老名さんに謝った戸部が八幡のグループに加入

その後八幡の勧めにより戸部が大岡、大和に声を掛けてグループ入りを勧め加入

とにかく各々の胸の内はわからないが一心不乱に部活に打ち込みその結果二回戦敗退ではあったが甲子園初出場、初勝利を掴んだ野球部

四番でエースの大和は千葉ロッテに指名の打診がありもし本当にドラフト指名があったら進学断念も視野にいれているそうだ

ラグビーの大岡も県大会決勝三回進出と言う実績を手に体育大の推薦枠を手に入れ今なおトレーニングに余念がない

両者共に八幡の

「取り敢えず部活に集中しろ、今のお前らゾンビ呼ばわりされてた俺より死んでるぞ？

部活に燃えて復活して見せろよ？でなきゃそれまで部活やって来た自分自身を否定することになるんじゃねぇの？」

そう言われて

「人の顔色伺うのに疲れた…忘れる為にも暫くラグビーの練習にのめり込むわ…要らんことで頭悩ませなくても良いくらいくたくたになるまでな…」

そう大岡が開き直って言うと

「だな、俺も部の奴等に秋季大会は迷惑掛けたから夏は気合い入れんとマジにヤバイからな…」

そう呟く二人に

「おう、頑張れよ…間接的なサポートをしてやるからよ」

その言葉通りに家庭科クラブの協力の元に握り飯の炊き出しして差し入れや女子マネの居ない両者の為にユニフォーム、ジャージの洗濯を請け負い少しでも練習に集中させた
戸部率いるサッカー部の場合事情は大きく異なっていた
前任の無責任極まりない
「皆仲良く主義」
により切り捨てたただ一人の仕事をする、仕事のできる一色いろはを庇えずにに三下り半を叩き付けられたサッカー部のヘルプ要請に答えると言う人材が居なかった
そう、葉山隼人の負の遺産の使えないマネージャーがいる内は例え八幡の要請でも首を縦に降るものは無かった
それも自業自得な一面があるのもまた事実で冬休み中に人知れず転校した葉山教の信徒達の大半は隼人が姿を消したのを知りサッカー部のマネージャーを
次々に止める中思い止まったのはちやほやされたかっただけではっきり言って足手まといを引き留めたことに気付いたのは…
言いように顎で使われているのを自覚しかつ葉山を勝手にライバルしていたヤンキー擬きがそのマネージャーと結託して戸部をサッカー部から追い出そうとしているのに気付いたときだった
もっとも策略と言うのもおがましく八幡に突きつけられた証拠とたまたま聞いていた本人達の会話を録音した物を教師に提示し
「被害者である戸部およびサッカー部に温情ある采配を願う署名です」
そう言って八幡自らが校長に土下座して懇願
その姿に感銘を受けた校長は
「仲間である君達を守った男の気持ちに報いるのはただひとつだけ」
そう言って一連の騒ぎの責任をとるべく出した戸部の退部届けをその場で破り捨てた

八幡の誕生日、城廻めぐりルート編

誕生日城廻めぐりルート編

比企谷八幡君…私にとっては印象的な後輩の…ちょっと？いや、かなり気になる男の子だ

柔道部の問題で出会い文化祭、体育祭と何かと縁の有る後輩でよくよく考えればわかるけど彼が居なければそもそも文化祭は中止だったし閉会式に関して前代未聞のも大不祥事を引き起こしていただろう

「人は信じられない真実より信じられる嘘を選ぶ」

誰の言葉なのかは知らないけど文化祭以降の彼を取り巻く環境はまさにそれで私自身偉そう事を言えた義理じゃないけど今ならわかる

人はやたら本当の事、真実と言うけどそのくせその真実から目をそらす…特に自分にとって都合の悪いことほどそれが顕著に現れる

と、今はそんなことより明日の彼の誕生日に何を贈るのかを探しに来ているのなに考えてるんだろうか？

私が知ってる彼が好きなものって言ったらマックス缶コーヒーと妹ちゃんにラノベと聞いた話によるところのプリキュア…

それと最近は料理に加え裁縫も覚えとかで彼は一体どこを目指しているのだろうか？

いやいや、また脱線してるし…

とにかく改めて考えてみたら彼の事を何も知ってないこと気付いて驚いた

彼の事を知ってるつもりでいた自分に何よりも驚いたんだけどね

そう思っていたらぽの雑貨店であるものを真剣に見ている彼を発見した

最初は声を掛け様と思って近付いたのだけどもしかしたら彼の好みがわかるかも知れないチャンスかもしれないっ

と、そう思って様子を見ているとどうやら処分品コーナーに置かれ

ているステンレスの水筒を見ているうだった…
恐らく寒くなってきたらアレに熱いお茶を入れて飲むつもりらしいね
あ、財布の中身見てガックリ項垂れた…お金足りないんだ諦めて元のワゴンに戻してお見せを出ていったけど諦めかつかないのがわかるほどに何度も振り返ってる

（ヨシッ、彼が完全に見えなくなった）
心の中でそう思い小さくガッツポーズをしてワゴンに近付き値段を確認してみたら1，４８０円と書かれたシールを見て私は彼とは違う意味で肩を落とした
それでもあの様子からして恐らくはＡＴＭで下ろしてくるのは間違いないから彼には申し訳ないけど一足先に買ってしまおう
そう決断して買い求めた
かなりズルいとは思うけど彼が欲しいものが手に入るんだから悪い話じゃないと思う
さぁ、帰ってプレゼント用のラッピングをしなきゃ
取り敢えず懸案のプレゼントも決まったことだし安心して明日のパーティーに行けるよ、うん明日が楽しみだな…

八幡の誕生日、三河香保里ルート編

生徒会長三河香保里ルート編

あたしは三河香保里、なんの因果か一年の時に選ばれて生徒会長をしてしていますがこんなはずじゃなかったんですけどね

なんでこうなったかについては未だに疑問だらけですが副会長の本牧先輩を始め他の役員達との連携もバッチリでなんの問題もなく運営できてると思います

比企谷八幡と言う先輩の存在を認識したのは海浜との合同企画によるクリスマスイベントの打ち合わせの会議だった

訳のわからないことを言ってばかりで一向に進まない会議に苛ついたあたしは前任の城廻先輩に相談したら比企谷先輩のいる奉仕部に案内してくれた

そしてその比企谷先輩はその日の会議から出席してもらったんだけど呆れた海浜の生徒会執行部の人達は女子にしか目を向けず挨拶もなにもしないし求めもしない

庶務の女子らしき人は気付いたけど比企谷先輩がナゼか口止めしたけど…

翌日の会議では

同じ奉仕部部の川崎先輩の妹さんによる日本語喋れないの発言をきっかけに議長交代劇で一気に会議は進みあたし達のイベントは大成功を納め

その後バレンタイン、ホワイトデー、母の日に父の日に七夕とイベントをこなしてきて二校による合同イベントはら早くも定番化してきているし比企谷先輩のところにはいろんな勧誘が来ているそうです

イベント企画会社とか芸能プロダクションとかからも真剣に引き抜きしようとしているとか聞きましたからもしかしたら比企谷プロデューと言う未来があるのかもしれないですが

そう考えると不思議でしかたありませんがとにかく不思議な魅力を持つ先輩であるのは間違いありませんね

そしてもうすぐその先輩の誕生日が来ますプレゼントをなんにしようか思案中です
六月のあたし誕生日には先輩がデザインした可愛い先輩の手作りエプロンと先輩特製のマカロンをいただきましたから私もなにか特別感のある物を贈りたいと思ってます
しかし、あまり手先が器用とは言い難いあたしには手作りはかなりハードルが高いので検討の余地なく却下ですけど…
正直難しいですよ、この問題は
そう思いながら溜め息を吐き空を見上げてましたが家でボーッとしててもいい考えが浮かぶはずもないのでらぽに行ってみることにしました
夏のレジャー用品もそろそろ処分セールが始まる頃ですかね？
まぁ、インドア派の比企谷先輩はあまり縁は無さそう…
「あ、これなら…」
そう呟いて手に取ったのはクーラーバッグで比企谷先輩がお弁当入れに使ってるクーラーバッグが結構くたびれている事を思い出したんですよね
「うん、これなら大きすぎないし猫のプリント柄も可愛いよね、定価はそこそこするけど引き下げ価格ならそんなに高くないし…」
そう言ってレジに持っていき支払を済ませたら比企谷先輩とばったり出会しまじで…
何かよくわからないうちにフードコートで一緒に食事をすることなりまして先輩は暑さに負けずにラーメンを、あたしは盛岡冷麺を食べましたけど…良いのかな？
先輩に奢ってもらっちゃても？
そう思いながらちゃっかり奢ってもらいましたけど何かデートっぽくてラッキーでしたね
いつか比企谷先輩とデートがしたい
そう思いながら別れを告げ夏の午後の事でした

八幡の誕生日、姫菜×戸部＋（大岡＋大和）編②

「君にとって最後の夏のインターハイの予選でそれなりの結果を見せサッカー部はもう大丈夫だと言う姿を見せることではないのかね？

責任をとってと言うなら我々もまた責任を取らなくてはいけないのだよ？

だから大騒ぎになる前になる前にその目を潰してくれた比企谷君に大会の成績でもって応えなさい、良いですね」

実質的な処罰も朝の挨拶運動期間に校門に立ち挨拶をすることと学校が所属する地域の一斉清掃にボランティアとして参加することを言い渡されただけ

もっとも、問題のヤンキー擬き達と女子マネはそれを嫌がり自主的に退部して行きその後に別件の悪事がバレて退学処分となったのは戸部の知らない話である

姫菜が腐心していた戸部の告白を自分がナニかをする前に相談しても自分でなにもしようとしないで奉仕部に丸投げ押し付けようとした結果

女帝（雪ノ下陽乃）の逆鱗に触れ逆に独神を押し付けられた隼人と叱責を受けた結衣、雪乃を見て

「一歩間違ったらあたしも怒りを買ってたんだ…」

と、呟き暫くは生きた心地がしなかった優しい八幡は何も言わず手を差し伸べてくれたし戸部のグループ参加も葉山のようになしくずし的に押し付けずに

「戸部の事を許せとは言わんが謝るチャンスを与えてやってくれ」

そう言って頭を下げる八幡を見て葉山との決定的な違いを改めて痛感した

（隼人君ならきっとなんの責任も取る気がないクセに俺の顔に免じて戸部を赦してやってくれとか言うんだろうな…）

と、そう感じてしまったのだ

一見八幡が冷たく無責任にも感じるがその逆だ

そもそも戸部の為に八幡が頭を下げる必要はなく友を思うが故でありまた真に誠意を見せるべきは戸部の応援をしているだけに過ぎず

許すも許さないも本人がきちんと誠意を見せろと戸部の覚悟を問い掛けているのがわかったから謝罪の機械を受け入れたし相変わらずのお調子者の戸部のお陰て戸部×八を見せてもらえたのも受け入れたひとつの理由だろう

それに関してはさすがの八幡も勘弁してくれと力無く呟くだけだったのだが…

だから四者四様で八幡に感謝を込めたなにかをしたくて集まっていたのだが中々妙案が浮かばず結局は優美子に相談するしか思い付けなかった

そんな四人にひとつの回答を指し示したのは沙希で八幡と家庭科クラブの金居が放置花壇を見て勿体無いから何かしたいと話し合っていたのを教えると

今度は金居が先ずは雑草を処理して秋に向けて土作から始めたいと言われて手伝うことにした

勿論その話を聞いた八幡が大喜びしているのを見て頑張った甲斐があったと感じる四人だった

中秋の名月を貴方と共に

中秋の名月貴方と共にー三河香保里ルート編

生徒会長三河香保里ルート編

あたしは三河香保里、なんの因果か一年の時に選ばれて生徒会長をしてしていますがこんなはずじゃなかったんですけどね

なんでこうなったかについては未だに疑問だらけですが副会長の本牧先輩を始め他の役員達との連携もバッチリでなんの問題もなく運営できてると思います

比企谷八幡と言う先輩の存在を認識したのは海浜との合同企画によるクリスマスイベントの打ち合わせの会議だった

訳のわからないことを言ってばかりで一向に進まない会議に苛ついたあたしは前任の城廻先輩に相談したら比企谷先輩のいる奉仕部に案内してくれた

そしてその比企谷先輩はその日の会議から出席してもらったんだけど呆れた海浜の生徒会執行部の人達は女子にしか目を向けず挨拶もなにもしないし求めもしない

庶務の女子らしき人は気付いたけど比企谷先輩がナゼか口止めしたけど…

翌日の会議では

同じ奉仕部部の川崎先輩の妹さんによる日本語喋れないの発言をきっかけに議長交代劇で一気に会議は進みあたし達のイベントは大成功を納め

その後バレンタイン、ホワイトデー、母の日に父の日に七夕とイベントをこなしてきて二校による合同イベントはら早くも定番化してきているし比企谷先輩のところにはいろんな勧誘が来ているそうです

イベント企画会社とか芸能プロダクションとかからも真剣に引き抜きしようとしているとか聞きましたからもしかしたら…

比企谷プロデューサーと言う未来があるのかもしれないですが可

愛い女の子に囲まれてる先輩はみたくないです
そうあの人の事を考えていたらあの人からのメール
ーすまんが外を見てもらえないかー
そう書かれたメールを見て窓の下を見ると会いたかったあの人がいた…
だからあの人に会いたくて慌てて上着を羽織ると玄関に走ると先輩が居て
「こんな遅くに非常識だとは思うんだが五分でも十分でもいいから一緒に満月を眺めたくてな…自作のまんじゅうを持ってきた」
そう彼が言うと
「私も相席して一句披露して宜しいかしら?」
同居しているお婆ちゃんがそう声を掛けると
「その説は色々ご指導頂き感謝してます」
そう言って頭を下げてから私に紙袋渡して
「まんじゅうは人数部用意しましたから共に静かに眺める一時は悪くないって思いますから…」
彼がそう答えると
「香保里、私はお茶の支度をしますから先輩君を私の部屋の軒先に案内しなさい
縁側に座って月を眺めるのも乙なものですよ」
そう言って穏やかに微笑むお婆ちゃんに頭を下げる先輩
先輩が作ったお饅頭は甘すぎ何個でも食べれそうで私の家族にも好評です
そして先輩への質問タイムでやっぱり先輩の妹の小町ちゃんのブログお兄ちゃんのお弁当について
正確にはお弁当についてかな?
そんな中小6の弟がナイスなアシストを
月末に運動会有るから八幡兄ちゃん(私が名前で呼べずにいるのに!?)のお弁当食べたいし応援にも来てほしい
そう言って甘えたら先輩は照れ臭そうに笑いながら
「おう、その日はまだ図書館で勉強するくらいしか予定はねえから

俺で良けりゃ応援に行くぞ」
そう先輩が答えると
「お弁当もだよっ！」
って図々しい…あ、でも私も食べれるんだよね我が弟ながらいい仕事をしてくれますが一応
「良いんですか比企谷「八幡先輩っ♪苗字呼びダメでしょ？ライバル多いんだからもっと踏み込まなきゃ負けてしまいますよ？」八幡先輩…」
お母さんに突っ込みをいれられながらそう聞いたら
「問題無いぞ、俺が乗り気じゃなきゃ取り合えず即答で断るからな？」
そう答えてくれましたから嬉しくなりました
妹も負けじと体育祭に文化祭を招待して約束を取り付けてますけどこちらはスゴく嫌な予感がするんですけども？
「君が飲める歳になったら一緒に飲みたいな、まぁ君のお父さんとはたまに会ってご一緒してるんだけどね」
とは、お父さんの弁でお父さん以外のみんなが溜め息を吐きました
そんな感じで短い時間だったけど色々な約束を取り付けたし
「八幡先輩…か」
そっと呟くと嬉しすぎて涙が溢れました…
「よしっ、明日から頑張ろう」
そう気合いを入れ明日からの聖戦に備え今夜早目に…眠れるのかな？私
ちょっぴり不安な夜でした

中秋の名月を貴方と共に…一色いろはルート編

一色いろはルート編

先輩…今頃家で勉強中なのかな？
そう呟いて窓から見えている空高く上った月を眺めていた
いよいよ受験勉を本格的に始めた先輩はほとんど部室に来ることはなくたまに顔を覗かせてもいつでもあの人の周りには女子の先輩達に占領されていた
三年進級を機に先輩と沙希先輩はＪ組に編入したためクラスメイトではなくなった優美子先輩はともかく沙希先輩は少しは遠慮してほしいものですよ
どうせ先輩は勉強に集中している間は多少の事じゃその集中をと切らす事はないんですからね…あの先輩ときたら全く困ったもんですよ
まぁ、そこが魅力とも言えなくもないので否定しきれないんですけどね
それにしてもよりによってＴ大ですか…私が後を追えないじゃないですか？
「一緒に大学行けないじゃないですか？
どうしたら良いんですか私の進路…責任取ってくださいよね、先輩…」
満月を見上げながらそう愚痴ってしまう私は悪くない
だからと言って先輩が悪い訳でも無いんだよね
あれだけ色々やってるのに苦手な理数系を克服して今や学年一位ですからね先輩は
結局は私の努力不足でしかないんですからね…
だからせめてＴ大に近いキャンバスの大学を目指すつもりなんですけどね
そしたら近所のアパートが借りられるじゃないですか？

そうと決まればこのまま先輩達から預かったこのバトンを（奉仕部）を小町ちゃん達後輩に引き継いでもらう日まで頑張りますか
今では生徒会で対応しきれない案件は奉仕部に…が総武の常識なっていて校長先生からの信任も篤い先輩の後継者として期待も大きく結構プレッシャーはありますけどね
そう考えていたらドアを叩く音がして
「いろは、下でメル友とお月見するから貴女も付き合いなさいよ」
そうお母さんに言われたけどあたしの知らない母さんのメル友とお月見するとかって正直言ってそんな気分じゃなかったから
「そんな気分じゃないから止めておきます」
そう答えたら
「そうなの？せっかく比企谷君に無理言って来てもらったのになぁーっ♪」
（ってえ？な、何…先輩がお母さんのメル友？ってどうゆー事…そんな話しは聞いて無いんだけど？）
プチパニのあたしが
「先輩が来てるの」
ドアを開けてそう聞いたら
「そう言ったの聞こえなかったの？比企谷君はお母さんのメル友なのよっ♪」
良い笑顔で言われたあたしは
「それならそうとあらかじめ言ってくれてたら……別にできる準備…と言ってもする事何てたいしてないんだけどそれにしてもいつの間にメアドの交換何てしてたんだろうか？全く油断も隙もあったもんじゃない」
そうブツブツ言ったけど最後に
「お母さん、有難う」
そう呟くと
「どういたしまして」
と、茶目っ気たっぷりの笑顔で答えてくれました
「たまには先輩に勉強を忘れてまったりした一時を過ごしてもらい

ましょうか」
そう呟くと私は部屋を出て大好きな先輩の待つ一階のリビングに向かうのだった…

中秋の名月を貴方と共に…比企谷小町＆鶴見留美ルート編

比企谷小町＆鶴見留美ルート編

小町視点

「今夜は中秋の名月なんだから帰りにマックで月見バーガー買ってきてね、団子やお饅頭は小町が用意しとくから留美ちゃんと三人でお月見をして秋の夜長を楽しもうよ？」

それくらいの息抜きしたってバチは当たらないよね？

そう言ってお願いしたのは今朝のお話しで今夜は留美ちゃんがお泊まりの日

一人っ子留美ちゃんを見ていて小町は気付いたんだ…

それまでは世話のやけるダメダメなごみぃちゃんって

呼んでだけど本当にお兄ちゃんが小町の前からいなくなってしまったら

始めからお兄ちゃんが存在しない小町が一人っ子の世界を想像したとき小町は泣いた…

お兄ちゃん…比企谷八幡の居ない世界なんかあり得ないって思ったんだ

留美視点

お父さんは短期？の単身神赴任中でいないのにどうしても断れない出張で私が一人になるのを心配したお母さんは八幡に話して今夜は比企谷家に泊めてもらう事になった

晩ご飯は小町に八幡の好きな料理を習いながら二人で用意して今は八幡が帰ってくるのを待っている

いつかはライバルでも今は未だ互いにハンデを持つ者同士で同盟を結んでいる

血の繋がる妹であるからこそ誰よりも側には居られるけど決して

報われない…報われてはいけない恋に身を焦がす小町と小町と比べれば壁は厚いけど決して許されない恋じゃ無い私
だけど八幡の同世代の彼女達に比べたら乗り越えなきゃ行けないものが多すぎるのは不条理だ私と八幡の年の差はたったの六才
それがいけないのなら六才以上離れている夫婦やカップル全てを逮捕してからにしてもらいたい特に口を開けばキモいしか言えないボキャボラリー貧困女と毒しか吐かないんだ独神予備軍には私の恋路を邪魔する資格はない
と、言うより八幡の前から姿を消すか態度を改めるかしろっ！て思っていたけど今やその面影は全く無い二人に同情はしない
別にあの二人がいなくなったからって私の恋路を邪魔するモノはライバルの存在だけじゃないんだからさ
だから今夜は小町と眠くなるまで八幡の話をしようと思う
実妹の小町と妹扱いの私は小町と同じポジ…つまり一人の女の子として見てもらえない枠に居るのだから
他の女子だと泊まる何て話しは絶対に嫌な顔をするだろうけど私や京華なら
「小町か母ちゃん達の部屋なら良いんじゃねえの？
その二人が家に泊まるなんざ余程のしたいならなきゃ無い話だからそんな時まで俺は知らんぷりできる程冷たくなきゃ強くもねえよ」
と、言い訳するタイプなのだから
だから今夜は八幡と静かに満月を見ながら大人のオンナを少しでもアピールできたらって思ってる…
だから八幡、早く帰ってきてよ…お願いだからね？

中秋の名月を貴方と共に…三浦優美子ルート編

三浦優美子ルート編

中秋の名月、か…今まで考えたことなかったな…

あーしはつい先日行われたばかりの八幡が司会進行を務めたイベントの事を思い浮かべ感慨に耽ってた

今までイベントといえば騒ぐモノって思っていたあーしには斬新な企画だったから…

偏差値の違うあーしが八幡と同じ大学は難しいい下手なとこに行ってツマラナイ野郎に言い寄られるのも鬱陶しいだけだしさ…

幸い八幡が目指す大学にそう遠くない大学…女子大推薦入試を受けるつもり

もちろん今は試験に受かるべく勉強の毎日だけど八幡の手作り弁当があーしを支えてくれてるし仲間内で集ま。って勉強会してる時に勉強に行き詰まってるとハーブティーを出して気持ちの切り替えをさせてくれる

もちろんわからないところは丁寧に説明してくれてかなりわかりやすくあーしの学力アップに貢献してくれている

内申も千葉村や奉仕部での活動は決して小さくはないと思う

そんな事を考えながら気分転換に出掛けたコンビニに予備校帰りの八幡がいた…

(こんな嬉しい偶然は久し振りで嬉しすぎるし…

そう思っていたら八幡の方から声を掛けてきてくれた上に

「店内のイートインコーナーで何か飲みながら少しだけ話でもしないか?」

そう言って誘ってくれた

空に浮かぶ丸い月を眺めながら相変わらずあの甘ったるいコーヒーを飲む八幡は

大して面白くもない予備校の話をしているが本題じゃないのはわかっているからこちらも適当に返事する

そして

「家送ってく近いんだろ？」
そう言ってくれた八幡の優しさに甘える事にして自転車を押す彼とならんで歩き始めたあーし達だけど
「春まで待っててほしい、受験が終わるまでな…だからその為にも今は遠回り（浪人）なんかしてる場合じゃねぇから今は勉強に集中したいんだ…
もちろんそれが俺のワガママだってのらわかってるがそれでも待っていてほしいんだよ…そうしてぐれたら俺もちゃんと腹をくくって答えを出すからもう少しだけ待ってほしいんだわ
伝えたい想いをなんとか言葉にしてお前に伝えるつもりだからな？だから春まで俺を信じて待っててほしいんだわ」
そう言ってあーしの身体を抱き締め頭を撫でてくれる八幡…
今夜の夜風は少しだけ冷たく肌寒かったけど八幡に抱き締められて顔は熱く火照っていた
玄関前まで送ってくれあーしが家に入るのを確かめてから自転車に股がり走らせ始めた八幡を部屋の窓から見えなくなるまで見ていた、満月に見られなからね
だからあーしは月に願った…八幡の努力が実を結びあーしの想いが八幡に届くことを…
春からのキャンパスライフに期待をこめてね

中秋の名月貴方と共に―坂月彩月編

坂月彩月ルートだけど
部室には顔を出すことはあっても既に部長職は二年の一色さんが引き継ぎお悩み相談も彼女がメインとなり回答している
そんな奉仕部の様子を見ながら自らの勉強と勉強の他各種の相談にのっている彼には全く頭の下がる日々を過ごしている…
そして彼の手作りお弁当はとても美味しく幸せを噛み締めてますが夏休みにその事がお母さんにバレ根掘り葉掘り尋問され彼が部長を務める部活の顧問をしてること
お母さんが心配していた通りにろくでもない食生活をしていた私にお説教して以来朝食用のおにぎりとお弁当を毎日渡してくれ
たまに夕食をご馳走したくて誘うと
「働き初めで慣れない独り暮ししてるのに無駄遣いしてんじゃねぇよ、先生
料理なら俺が作るから先生は材料費だけ頼むわ」
そう言って彼とスーパーで買い物した事や彼の手料理に舌鼓を打っている日々であることを洗いざらいい喋らされました
もちろんいけない事なのだからこの想いを少なくとも彼が卒業するまでは彼に告げない事も
もちろん有名な彼の事は母さんも知っているからみんなに優しく必要ならば厳しくなれることも話、未だ特別な女性が居ない事も話すと
『未だ…なんでしょ?なら何らかのアピールくらいはしとかないと後悔するよ?
ライバルがかなり居るんだろうからね』
とも言われたけど少なくとも反対ではないみたいで安心したがこれも彼の人徳のなせるわざだろう
そんな事を考えながらお持ち帰りした仕事が一段落ついたのでコンビニに買い物に来たら彼が店内にいるのがわかり嬉しくなって駆け寄ると

『先生、大人の女性としてもう少し落ち着かれては如何ですか？』
（そう言って溜め息をつかれてしまったけど意識してる異性を前に未々落ち着き払える年でもないよね？）
そう自分で自分に言い訳してから
『私は仕事に一区切りついたから何か飲み物でもって来たんだけど貴方は？』
そう聞いたら
「俺は予備校が終わって帰る途中に喉が乾いたのでたまたまこの店に立ち寄りました」
そう言って篭の中身を見せてくれたので覗いてみるといつものアレと月見バーガーと書かれたハンバーガーらしきもの入っているのが見えたから
「なら今から「うら若き女性がナニ言ってるんです？この店にはイートインがあるんですからここで何かかいましょう」」
そう言ってスイーツコーナーに向かう彼についていくと
「ナニ食べますか？奢りますけど？」
そう言われて
「じ、じゃそのウサギさんの形の大福かな？」
私がそう答えると
「わかりました、後は飲み物を取ってきてください…その間に俺は篭に入れておきますんで…」
そう言われた私はホットの玄米茶を選び取ると彼の横に行き会計をしてもらう為に手渡すと
「勘定済ませますから先に席について居てくださいガラスの側が良いですね」
そう言われて
「うん、お願いします」
そう答えて席について待っていると彼がきて
「お待たせしました」
そう声を掛けてきた彼が格好良くて思わず見惚れていると
「今夜は中秋の名月…なんですよね」

そう呟きハンバーガーを頬張る彼を見ながらその事を思い出し
「そう言えばそうだったね？すっかり忘れていたけど…」
そう答えると
「早く仕事に慣れると良いですね…」
そう、優しい笑顔を向けて言ってくれる彼だけど…
（この笑顔を私だけに向けてほしいと願うのはワガママだろうか？
そしていつか彼の口からこの言葉を聞きたい…）
ー月が綺麗ですね…ー
と、言うそのたったの一言を私は夢見ている

中秋の名月を貴方と共に…金居可南子ルート編

金居可南子ルート編
（我ながら素晴らしい出来映えだ…）
比企谷君に食べてもらいたくて作った真っ白なウサギをモチーフに仕上げた月見まんじゅうを見ながら一人悦に浸っているとカシャッと音がして
「ほい、送信っと…せっかくの渾身の力作を比企谷先輩に食べてもらわなくてどうするのよ？なんならお姉ちゃんも一緒に食べてもらったら？」
何て事言われて
「彼の周りに居る美人美少女達を知ってるんでしょ？あの中に入り込む勇気なんか私にはないよ…」
悲しい現実だけど上は奉仕部顧問の坂月先生…本人は比企谷君への想いを隠してるつもりだけど全然隠せてないからね？
それが余りにもの痛すぎる貴女の姿に誰も何も言えずに居るだけですからね？
あまり人の事は言えませんけど前任の平塚先生みたいに独神と呼ばれる日が来ないことをお祈りします
うん、本当に他人事じゃないですね…
「って一体だれに誰にメールしたのよ？」
そう聞いたら帰ってきた答えは
「八兄と小町先輩、いつまでも下らない言い訳してうじうじしてるつもりならアタシがモーションかけるからね？
あたしだって八兄はタイプだけど恋愛音痴なお姉ちゃんが珍しく乙女な振る舞いさせる八兄はお兄ちゃんでも我慢するけど他の女の物にさせるくらいならあたしだって八兄争奪戦に名乗り上げるからね？
いい加減腹くくりなよ？お姉ちゃん…あんな人そうそう居ないしお姉ちゃんの思いに応えられなくてもお姉ちゃんを粗略に扱う人

じゃないのは知ってるハズじゃないの？
ならダメ元でも良いから思いを伝えなよ？
ナニもしないで後悔するよりはずっと良い」
そう妹にハッパをかけれた私は今彼の通う予備校の玄関前にて彼の出待ちをしてます…
授業が終わって受講生が次々に吐き出されていく中で彼のトレードマークのアホ毛が見えたので嬉しくなって駆け寄りました
そんな私に気付いた彼は驚いたけど一瞬嬉しそうな顔をしてから真面目な顔をして
「こらっ、金居さんみたいに可愛い女の子がこんな時間に用もないのに一人で出歩くモンじゃありません」
と、言ったら後ろから彼の頭を叩いて
「アンタに用がある以外に決まってるだろうが、この唐変木が全くさ…」
そう言って深い溜め息を吐いて私が手にしている包みを見た川崎さんが私に近寄り小さな声で
「今夜はアンタに譲るけどあたしも負ける気はないんでね…まぁ、アイツの鈍さにゃお互いに苦労させられるだろうけどお互いに正々堂々と頑張ろう」
そう言って離れた川崎さんは
「そんな偉そうな事をゆーならアンタが家まで送りゃ良いんだろうが？」
そう言って一足先に家路に付くと照れ臭そうに右手の人差し指で頬を掻きながら
「まぁ、確かに沙希の言う通りだな…送っていく」
そう言って自転車置き場に向かう彼について行くと
「後、乗るか？」
そう聞かれた私はいつもなら絶対無理だけど勇気を出して
「お願いしましゅ…」
と、しっかり噛んでしまい落ち込んでると
「気にしなくても良い、俺も昔はかみまくってたからな…」

そう言って苦笑いする彼の笑顔はかわいく見えそんな彼の表情を見れてスゴく嬉しかった
ご都合主義により私の家は彼が通う予備校と自宅の中間位に在るのでたまに自転車で家路を急ぐ彼を見掛ける事がある
ただし…見送るだけで声を掛ける勇気はありませんでしたけどね
だから今夜は思いきって彼を近所にある児童公園に誘う事を決意しましたから
「今夜は中秋の名月だよね？だから比企谷君と一緒にお月様を観ながら食べれたらな…って」
「金居さんの妹ちゃんが送ってくれた写メのヤツな、アレを俺に？」
言葉に詰まった私をフォローするようにそう言ってくれたからうつ向いたまま小さく頷くと
「その公園ってすぐ近くにコンビニか自販機って有ったか？」
そう聞かれたから
「うん、コンビニはないけど自販機が入口側に置いてあるよ
しかも、この時期ならマッカンもホットとアイスが置いてあるんだよね」
そう私が答えると彼は嬉しそうに
「おう、そいつは良いことを聞いたぞ
これから寒くなってきたら予備校の…帰りが辛いからホットのマッカンの置いてある自販機の場所は重要な情報だからなっ♪」
そう嬉しそうに言ってくれたから私も嬉しかった
それからもう少し自転車を走らせると公園と自販機が見えてきてたばこ屋さんの名残のある建物の横に置いてある自販機にマッカンも置いてあった
「ここのおじさんががマッカン好きだからその人の希望で置いてあるんだけどおじさんいわく『類は友を呼ぶ』らしくて結構売れてるんだって」
そう話すと
「そうだな、悔しいがこの時期に一台の自販機でホットとアイスで置かれているコーヒーは少なくマッカンは見たこと無かっただけに

この光景は衝撃的だな」
そう言って二人乗りで自転車を走らせてきた彼はうっすらと汗をかいていたのでアイスのマッカン私もホンの少し前まで彼と密着していたことを思い出してしまい急激に体温が上がっちゃったみたいな感じだからアイスにしました
公園にあるテーブル付のベンチに並んで座り、共に月を見上げる私達はしばらくは黙って観ていたけど彼は月を見上げながら何やら真剣に考え込んでいたけどが不意に
「お饅頭もらって良いかな？」
そう言われてそっと彼の前に差し出すと
「ウサギの形の大福か…可愛いのな…」
そう言って一口かじると
「いもアン？」

そう言って驚いた顔の彼に
「苦手だった？」
心配になって聞いたら
「いや、逆だな…母ちゃんの方の婆ちゃんが元気だった頃いもアンの蒸かし饅頭をよく作ってくれたっけ…」
そう懐かしそうに言うから
「何でいもアンだったのかなって思わず呟いたら」
「大した意味はないぞ、婆ちゃんが自分のお茶うけの分もあるから好きないもアンにしたっていってたからな
そのえいきょうでいもあんは結構好きだぞ？なかなか売ってないけどな」
そう言って笑うから
「最近は夜遅くまで勉強してるんでしょ？もし良かったらいもアンの蒸かし饅頭をお夜食に差し入れしても良いですか？」
そう言われて再び驚いた彼は
「あーっ、そうだな…」
と、何か言いにくそうな彼は頬を指で掻きながら

「たまには俺も気分転換に菓子作りでもしたいから一緒ににどうかなって思うんだが…どうかな？」
って断られたらって…心配していた私の真逆のその答えに
「それが比企谷君の気分転換になるなら喜んでお手伝いします」
そう答えると
「今度の週末の都合良い日と居る材料をメールしてくれ、材料は俺が用意する
何せ母ちゃんと小町も好きだからどうせ作るならたくさん作らんと足りないと文句言われそうだからな」
と、おどけたように肩をすくめて言う彼に
「私なんかで良いのかな…」
震える声でそう呟く私に
「おう、実は皆が祝ってくれた俺のバースデーパーティーからずっと気になってたんだけど今日確信した」
そう言って一度立ち上がった彼は片方膝を地面に着けると
「金居可南子さん、俺は貴女の事が好きです…大学に進学し未だ学生を続ける俺にでかい口は叩けないがいつかその先の約束を交わせる仲になりたい、俺とお付き合いしてもらえませんか？」
『時が止まりました…』私だけ
ー夢なら覚めないでほしいー
そう願いつつ私は答えた
「わ、私で良ければ喜んで…」
そう答えたけど
ー夢なら覚めないでっ！ー
そう心の中で叫んだ
その後お饅頭を食べ終えマッカンものみ終えた私は比企谷君に送ってもらい家に帰るとやきもきして待っていたお母さんと妹に上の空で
『ただいま』
と、言って部屋に戻ったけど玄関前にて彼がお母さんに
「未だ学生を続けるつもりの俺が無責任な約束はできませんがいつ

か来るその先の約束を交わせる間柄になりたいからお付き合いしてください
そう言って承諾をいただきました
取り敢えず未だ学生で受験生なので取り敢えずは共通の趣味であるお菓子作りとして気分転換を兼ねたおうちデートを考えますのでこちらにお邪魔することもあると思いますがよろしいでしょうか？」
そう言って頭を下げる比企谷君に妹は
「それは八兄が本当にお兄ちゃんになる日が来るってこと？」
そうきいたら
「そのつもりで勉強も頑張るつもりだしさいわい共通の趣味も色々有るから勉強に差し支えなく楽しめるから焦らず絆を深めたいと思っている
未だ、土曜と日曜のどちらにするかは決まっていませんが家で蒸かし饅頭を作りますのでお嬢さんをお借りしてもよろしいでしょうか？」
そう言って言って再び頭を下げる比企谷君に妹は
「その日は私もついていっても良いですか？」
ってとんでもない事をいったらしいけど彼の返事は
「告白の後から心ここに非ずって感じでな…このまま決行して指を切ったらとかやけどするんじゃないとか心配…それ以前に事故が心配だから迎えに来た方が良いんじゃないのかとか悩んでたから協力してもらえたら嬉しいな」
そう言ってくれたそうです
「今日から比企谷君とお付き合い…」
そう言ってボーッとしていたら新聞紙を丸めたもので頭を叩いて
「家まで送ってくれた彼氏見送らないでなにヘラヘラ笑ってるの？
未だ、お姉ちゃんはライバル達に一歩リードしてるだけで諦めるような人達じゃないんだからしっかりしなよ？ってお説教されました」
でも、それで彼からの告白が夢じゃないってわかったから幸せです
…週末が楽しみです

中秋の名月を貴方と共に…川崎沙希ルート編

沙希ルート編

今夜はいわゆるところの中秋の名月と言われる日だけど特にナニをするって訳じゃなかった
いつもの様に予備校が終わり荷物を片付けて帰り支度を済ませアイツと合流した
「まぁ、気分転換にお茶と月見まんじゅうでも買って食いがてら月でも眺めるか？」
そう八幡が誘ってきたからあたしは頷いてアイツと一緒に予備校近くのコンビニに来ている
ホットの緑茶とまんじゅうを選んでかごにいれると支払いをするアイツを見ながら待っている
支払いを済ませ二人ならんで店を出て近くの公園を目指すあたし達はゆっくりと歩を進める
月明かりに照らされそぞろ歩きをするこの時間が愛しい…そう思えるから

綺麗な真円を描く月を眺めながらお茶とまんじゅうを食べながら特に交わすこともなく空を見上げるあたしら二人
「沙希に聞いてもらいたい話かあるんだが構わんか？」
唐突なその言葉にあたしはただ頷くだけで
「そうか、なら聞いてほしいんだが…」
そう言って目を閉じしばらく考えてから
「本当なら大学の合格発表位は待つべきなんだろが…川崎沙希さん、貴女が好きです結婚を前提にお付き合いしてください」
時が止まり音を失った
そう言って頭を下げるアイツが見えるがあたしは声も出せないでいる
驚きのあまり…夢じゃないのかと疑いたく…いや、夢としか思えな

いんだけどさ
　でも…頭を下げあたし返事を待つアイツの姿を見ている内にあたしも少しずつ落ち着きを取り戻していき息を飲んで右の手を握ると大きく息を吐き出し
「あたしもアンタの事が好きだから…来春を笑って迎えたい…アンタと一緒にキャンパスライフを謳歌したい…だから今は頑張ろうよ？」
　そうあたしが答えると
「おう、付き合うっても今は受験優先だから一緒に弁当を食たり互いに励まし合い勉強するくらいであとはこんな感じで少し気分転換にお茶でも飲むくらいのもんだがな…」
　そう言ってあたしをまっすぐに見つめてくる
　この瞬間の訪れをどれ程待っていたことだろうか？
　色んなシチュエーションを思い浮かべアイツはあたしになんと言って告白してくれるんだろうかそう夢想した夜を幾度過ごしたんだろうか？
　そして今その待ちわびた瞬間がついにきた
　アイツは結婚前提にって予想を遥かに上回る言葉を口にしてくれた
　とても嬉しい言葉だ
「その申し込み、慎んでお受けします」
　アイツの手を握りそう答えると
「受験、頑張って春から同じキャンパスに通おうな」
　照れ臭そうに言って
「あまり遅くなったらまた大志が心配する…」
　そう言って差し出された右手を受け取り手を繋ぐと公園に入るときより近い距離となって公園あとにした…月の明かりに照らされながら

中秋の名月を貴方と共に…相模南ルート編

さがみんルート編

比企谷の進路が噂通りのＴ大であることがわかり私の進路も決め苦手な家事も積極的に手伝うようにして自炊生活に備えるあたしも本気だ

いつか比企谷を振り向かせる女になるのが今のあたしの心の支えだから頑張る他はない

今までしでかしてきたことのツケが巡りめぐって回ってきた今…容易な事じゃないのはわかるけど今のアタシを一人の人間として扱ってくれるのは比企谷だけ

だからまずはアイツに恥じない人間でありたいと思い真剣に進路を考え自炊生活も考えるまでに前向きになれた

先の事はわからないけど地元を離れて東京で過ごす時に高校の同級生だって言ってもらえたらそれで良い

うん、知らない奴だぞって言われるよりはずっとマシだな…

実際大抵の連中は今でもそんな感じの反応してるから卒業後は完全に垢の他人になるんだろうな

自業自得とは言え少なくともあたしから言わせてもらうと当時の会長がいった台詞には笑う

だってあの時の文実の実態は踊る阿呆（あたし）に見る阿呆（あたしの言葉にのってサボった連中と文化際後比企谷を責めた連中）にもののみごとにはまってるんだからさ

マジ、洒落にならないんだけど？

もっとも言い訳？させてもらうならあたしのアホさ加減で雪ノ下さんのお姉さんに踊らされた阿呆なんだけど当時はかなり逆恨みしたけど結局はあたし自身がしっかりしてりゃあの人の真意は読めたはず

つまるとこあたしが最初に踊り始めた阿呆だっただけでしわ寄せ食った比企谷始め真面目に文実の仕事してた人達に攻められるのは当たり前だけどサボった連中とそれを容認したその他おおぜいにあ

たしをせめるしかくはあるの？
とは言いたい
特に比企谷を攻めてた連中はだ
結局は因果応報で去年の卒業生は進学就職活動で苦労したらしいし比企谷の活躍に反し今も総武出身を隠すらしい
自分のいい加減さを棚に比企谷を責めた連中はもちろんついなの鬼よろしく比企谷を責めた連中は総武出身を隠す
はっきり言ってそれを知られただけでした相手はドン引きするからで今や総武の評価は偏差値は高いが人間性は最悪じゃね？
とまで言われているが直接あたしに対するいじめしたらそれを肯定することになり最悪閉校にも繋がり兼ねない
近所に海浜が有るから消滅か吸収合併か
どちらにしろ教師達にしたら椅子取りゲームになる未来は望まないからあたしに対する露骨ないじめには目を光らせていたからね
そんなことを考えながら予備校の授業を終えて家に帰るあたしはアイツの後ろ姿が見付けたけどどうやらマックに入るらしいから後をつけ偶然を装いって一人でいるアイツを見掛けたのは偶然なのは事実だけどね
ただでさえエンカウント率の低いレアキャラなのに見掛けた時には漏れ無く川崎さんの姿見かけるし二人が付き合ってるらしいって噂まで流れてるけど学校の様子を見てたらそんな気配はない
もちろん仲は良いがそれは川崎さんに限った話なんかじゃないからいまのところはあたしでも絶対に有り得ないと諦めなきゃいけない訳じゃない
って訳でマックで一緒に軽く食べてくべく比企谷に声を懸けるあたし…
あ、アイツは月見バーガーをのセットを頼んで上の階に上がったからあたしもそうしよう
あ、あたしの番だ…
「月見バーガーのセットをウーロン茶で、食べてきます」
と、注文しそれを繰り返す店員さんだけどあたしは比企谷と相席し

たいと妄想するあたしは上の空で適当に返し支払いをすませ上の階に上がり…

居た…しかも二人用の席に一人で居るから向かいの席を虎視眈々と狙う女は少なくないんだからあたしは先手必勝、女は度胸

気合いを入れて比企谷に声を掛けることにした

中秋の名月を貴方と共に…城廻めぐりルート編

城廻めぐりルート編

私は今とある予備校の近くにある喫茶店で母校の後輩である比企谷八幡と言う男子とコーヒーを飲みながら世間話を…

すいません、嘘つきました…

Ｉ　ｌｏｖｅ　千葉、小町ちゃん命の比企谷君が高校卒業後の進路に県外を選ぶなんて思いもよらない話を陽さんから聞いてその真偽を確かめたくて彼の通う予備校前で待ち伏せてたのですか彼は

「ええ、ホントですよ?オヤジの事だから高校卒業後は家から追い出すつもりなんでしょうからならいっその事東京にでもと思いまして…

俺だって小町に本気で嫌われる前にシスコン卒業しないと後で泣くハメになるのだけはヤだし大学進学ってゆーのも良い機会だし甘えを断ち切るつもりだから神奈川や埼玉も視野に入れて考えてましたよ?」

と、ナンの躊躇いもなく話してくれまして…

「別に一人暮らしなら地元でしたって…」

そう言って顔を曇らせる私に彼は

「それじゃ小町の為にならないし親父達の為にもならない」

と、訳のわからない事を言う彼を見詰めていると

「あのバカ親父はなにもわかっちゃない…とにかく俺と小町が仲良くするのが気にくわないから実家から追い出すだけ

骨の髄まで社蓄の両親が来年の春になったら定時…いや、そもそも母ちゃんはローテーションで仕事してるから残業だけの問題じゃない

小町を又一人で過ごさせる罪を繰り返すことに全く気付いてないし俺が千葉市内で部屋を借りたら間違いなく俺の所に住み着きますよ」

そう言って猫舌乗彼が中々冷めないコーヒーに舌打ちをしてお冷やの氷をコーヒーカップに落とすのを見ながら

「ナゼそう言い切れるの？」
私のその疑問に
「うちの家族は結局この十数年と言う月日を経ても大して変わっていない
特に親父は外見的にはハゲたとか腹が出た位で中身は何も変わっちゃいない
川崎家で例えるなら沙希達の親父さんが沙希とけーちゃんに対する接し方を一緒にするのと同じで小町はもう高校生
家を省みずに仕事してきた二人には実感なくてももう小学生じゃないんですからそれなりの対応をしなきゃいけないのに親父は未だに自分の罪から目を背けて小町と向き合わず…
又、小町をひとりぼっちにしようとしていることにさえ気づかない」
顔をしかめた彼は悲しそうに
「小町が妹であることにナンの変わりもないが小町と俺の子のどちらかしか助けられないって時に迷わずに小町は選べない
その頃には小町を守るのは俺であってはダメなんだって思うんですよ…
だからその前に小町は小町を最優先に守るヤツを探さなきゃダメなんですよ
その為に俺は小町と離れなきゃいけない、俺達はお互いに側にいてはいけない時期が来てるってそう思うんですよ…」
そう言ってテラスから月を眺める彼の横顔は寂しそうで…
「うん、君の考えはわかったよ…だから、大学が決まって住む所が決まったら住所が決まったら教えて」
そう話すと
「一応大学はともかく住む場所は一応バイト共に目星と言うか大学ダメなら正社員として就職するかと言われてるところ有りますから滑り止めが受かった時点でお話しします」
そう言って笑うと
「まぁ、誰彼話す気はありませんから教える人間には口外無用と頼

むつもりです
めぐり先輩との共通の知り合いである陽乃さんや奉仕部と生徒会役員には話しますからそれ以外の人にはちょっと…」
そう言って口の前に人差し指を立てる彼の顔は秘密の共有化を楽しそうに話す悪戯っ子のように輝いていたから
「いつかもっと踏み込みたい…」
そう呟いてしまった私と
「……」
顔を真っ赤にしながらコーヒーを口にしながら聞こえていないフリをしている彼がいた…
そう言えば今夜は中秋の名月だったね…
私と彼は暫しの間黙って月を眺めてました

三河香保里特別ルート、妹がライバル～中学校の体育祭

三河香保里ルート妹はライバル編～体育祭

今日は妹の薫の通う中学校の体育祭…のハズがなにこの人だかりは？

そう思ったのは八幡先輩も同じらしく

「他に入り口ねえの？」

そう聞いてきましたから一般の人には余り知られてない門に案内しそこから入る事にしました

入場受付中に向かおうと歩いていると私を呼ぶ声がしたので振り向くと我が恩師がいらっしゃいまして

「君が噂の比企谷八幡君ですね？申し訳無いですが君が受付中に行くと騒ぎになりますから…」

そう言って入場パスを手渡してくれまして

「受け付け表には後程記名してもらいますが取り敢えずこれをつけておいてください」

そう言われて

「もしかしてあの人だかりは八幡先輩の入待ちだったんですか？」

そう驚きの声を上げそうになる私の口を押さえ

「はい、大きい声出さない…ただでさえ目立つ人物と居るのを忘れないこと」

そう言われてコクコクと頷くと

「ヨロシイ、十二分に気を付けるようにっ！」

そう言って静かに笑って立ち去る先生の後ろ姿を見送ってから

「ナンかな…平塚先生を思い起こさせるタイプの先生だな？」

そう言って溜め息を吐く八幡先生に

「そんな事ないですよ？平塚先生ほど強引ｇ　ｍｙ　ｗａｙ　な先生じゃないですから安心してください」

そういったら苦笑いしながら
「まぁ、あの先生みたいな人は知り合いに一人いりゃ十分だからな…」
そんな事を言われて詳しい事は知らないけど
「厄介事は奉仕部に丸投げしてるらしい」
そんな噂や文化祭に合同イベント等一度として私はあの先生とは会ったことはなかったのだから学校の評価が如何にいい加減なものかを教えてくれましたね
そう思いながら溜め息を吐きました
開会式が始まり校長に来賓のスピーチ体育の教師からの注意の後にやっと準備体操で体育祭らしくなってきました
今日も気を付けないと熱中症がは心配になるレベルの好天に恵まれた一日になりそうです
と、言うか暑苦しい一日になりそうですよ
ただでさえこの学校の体育祭は暑苦しいのにと考えてしまいますよ

「スッゲー盛り上がってるのな…」
そう感心するとも呆れているともつかない表情で呟く八幡先輩に体育祭が学校の最大のイベントですからね
そう説明すると
「だろうな…見ててそう思う」
そんな何気ないやり取りにナンだか笑ってしまう私を不思議そうに見る八幡先輩が
「ナンか面白いことでも有ったのか？」
そんな事を聞かれて更に笑ってしまいましたよ、八幡先輩？
そう思ってる私と不思議そうに首を捻る八幡先輩は聡明なのに少し抜けてて
ひねくれた心の中に純粋な心が隠れてるってゆーのかな？八幡先輩って知れば知るほど不思議な人なのかもしれない…
って思ったら八幡先輩をそんな風にしてしまった者達に殺意のに

近いモノを感じたけど先輩はそんな事をしたって喜ばない
多分抗うすべを知らない人なんだって私はそう思うのだから…
人を傷付けたり人が傷付くのを見たりするのが辛い？かなしい？
よくわからないけど見たく無いのんだって思う
だから私が先輩の痛み、悲しみを理由に誰かを傷付けるの違うと思う…
少なくとも今の私にはそれを判断できるほど事情をしってはいないのだから
そして八幡先輩がそれを望んでいるのか否かもしってはいないのだから完全に自己満足にすぎないんだろうなと思う
人は相手の上っ面しか見ないしその上っ面の体裁を整えるのに四苦八苦しているけど三人の先輩方はそれが破綻して人生を狂わせたらしい
葉山隼人、由比ヶ浜結衣、雪ノ下雪乃の三人の先輩方でしょうね…
あの人達は結局何を見て何を求めていたのでしょうか？
みんなの葉山君と呼ばれみんな仲良くをもっとうにしてましたけどはっきり言ってしまえばあの先輩の存在自体が女子達の不和の元だったんですからね
しかもあの人はそれを何ともしようとはしなかったばかりか逆にあおる様な言動をしていた気がします
まぁ、それに踊らされてた私が何言ってるんだよ？って、言う気はしますけどね
まぁ、誠意の欠片も無い人なのだけは動かし様の無い事実なんでしょうね…
学校ではすっかり忘れ去られた存在ですから
特に忘れようとしたわけでもなく売れなくなったアイドルが忘れられていくみたいに自然にあの先輩の事を口にしなくなっていきましたね
って妹の学校の体育祭を見ながら私はいったい何を考えてるんでしょうね？
最終競技のメドレーリレーで勝敗が決まる展開になり私と違い運

動神経の良い妹の活躍もあり勝敗は…
私に当て付けのどや顔で八幡先輩に戦勝報告に着た妹に
T
「はいはい、それは閉会式終わってからにしなさいね？」
そう言って追い返しましたら八幡先輩も苦いしてましたね
その後学校を出るまでが色々大変でしたけど一日八幡先輩の側に
居れて幸せな日でした

初めてのデートは妹達と一緒に…

金居可南子のお月見後日談

二人でお月見した次の土曜日に私は妹と二人で比企谷家にお邪魔してます

妹には

『可南子はあてにできませんから次回は家に来てもらうように頼みなさいね？私だって未来の婿殿と楽しく過ごしたいのだから』

そんな風に言われておくり出された私達

比企谷家では比企谷君と小町ちゃんがで迎えてくれて楽しく始めた蒸しパン作り

さつまいもも何種類か用意されていて色々なバリエーションが楽しめそうです

「母ちゃんは夕べ連勤になったからその内に帰ってくる」

そう言われて比企谷君の告白後に始めてと言うか…なんと言うか、ハイ…緊張してますよ？

ただでさえ男の子の家って未だに慣れないのに始めての彼の家で彼のお母さんと会うなんて緊張するに決まってますっ！

『え？人によるんじゃないのかって？』

そんな事を言われたら私もこう言い返します

『そんなの交遊範囲の狭い私の周り限定ならそれが常識なんだからそれでいいんですっ！』

そう答えてもいいですか？

途中参加の比企谷君のお母さんも交えての楽しいお饅頭作りだったけどいきなりダメ出しを食らってしまった

私

「比企谷君「彼、彼女の間柄なら名お互い前呼びが当然でしょ？」」って言われて二人の妹達も頷いてるけど

『同じ女子相手でも名前で呼べない私にはめちゃくちゃハードルが高いんですけど？』

とは言えない私だった

でも…やっぱり憧れる八幡…君、だよね？まずは…いきなり呼び捨てはレベルが高すぎるからまずは思わす唾を飲み込み
「は、八幡くん……」
そう呼んでみた…多分顔真っ赤なんでしょうけどね、今の私ってチラッと見えたひ、八幡くんの顔だって真っ赤だったんだから仕方無いよね？
（こーゆーのって初めての経験だから）
そう自分に言い訳してると
「悪かったな…可南子、こーゆーのは男の俺から言い出さなきゃいけない事なのにな」
そう言って苦笑いしてる比企谷君だけど…え、あれ？今私を可南子って呼んでくれたよ…ね？
あんまりナチュラルに呼んだから一瞬気付かなかったけど…
「良い、八幡くんに名前で呼んでもらえたから…頑張ってよかったって思ってるから…」
そうぽつりぽつりと言う私に
「うん、いつものお姉ちゃんならすぐに諦めてうじうじしてるもんね
だからホント今回はよく頑張ったよ…諦めなくてよかったじゃんっ♪」
そう言われてやっとこれが夢じゃないんだって実感がわいてきました
お饅頭も蒸かし上がり皆で実食…と言いますかお茶会になりました
楽しいお茶会のおしゃべりの種はつきず気が付いたらもう夕食の時間で八幡くんが
「用意してあるから食べてけよ…」
（そう言ってくれたけど図々しすぎるよね？初日からだなんて…）
そう思って遠慮しようとしたら
「はい、私まで用意して下さって有難うございます」
そう言って私の言葉を遮り勝手に決めたからにらむと

「八兄も聞いたら遠慮するのはわかってるから聞かなかったし今日が土曜日だか明日ゆっくりしたら良いからさそってくれてるんでしょ？
何より八兄がお姉ちゃんにまだ帰ってほしくないからだとは思わないの？」
そう言われて驚いて八幡くんの顔を見たら真っ赤な顔して目をそらされましたたけど私まで真っ赤になっているから八幡くんのお母さんと二人の妹達にまで笑われちゃてます
食事も終わりやがて私達の変える時間になり上着を羽織る八幡くんに驚いてたら
「およ、お兄ちゃんが積極的に動いてるっ!?」
と、驚きの声を上げる小町ちゃんに
「二人は俺が招いた客だから当たり前だが由比ヶ浜結衣と雪ノ下雪乃は俺の意思を無視して押しかけた客だから対応が違うのは当たり前な話だと思うが？」
そう言った彼の表情が一瞬険しかったけどすぐにいつもの優しい笑顔に戻り
私達の肩にショールを肩に掛けてくれて
「一応用心の為な…」
そう言って自分の言った台詞に照れて右の頬を指先で掻いてる彼は照れ臭そうでいつもとは違った一面が見れた気がした
歩くと1時間弱の道のりだけど交通網は私達の都合に合わせてくれる訳じゃないから逆に時間が掛かるだけだし三人で他愛もない話をしながら歩く夜道も悪くない
来週はうちに来てもらい一緒にいも羊羹を作る約束をして帰っていく彼の背中を見送りながら愛しきと切なさそしてなんとも言えない切なさを感じていた…
金居可南子１８の秋に本気の恋を知る？
手強いライバル達がいるけどこの恋、この思いだけは諦めたくないから私は頑張れるし頑張るしかない
…うん、明日からも頑張ろうっ！

そう決意も新に彼の背中が見えなくなってから家の中に入る私だった…

運動会に八幡がきた～三河香保里特別ルート編

三河香保里ルート妹はライバル編

今日は弟が通う小学校の運動会なんだけどある意味主役は児童達じゃなかったりする

今年の夏も区役所からの要請により千葉村のサポートスタッフとして参加した八幡先輩の参加校に当たったこの学校ではその時に撮られた彼の写真がかなり出回っているから注目の的なんですよね

しかも先輩の手作りのお弁当が待っているうちの弟が羨ましがられ、友達達からやっかまれるのは自明の理であり仕方ないことだと思う

私だってこの状況を第三者の視点で見たらね？そりゃ嫉妬の嵐が荒れ狂う自信が有りますよ…ええ、間違いなく

先輩のファンらしい子の内いい成績を出した子達が彼に誉めてもらいたくて報告にくる様になったのはうちの弟が短距離走で一着になった事を

「よく頑張ったなっ、偉いぞっ！」

と、頭を撫でながら誉め残念ながら二着の子は

「いい勝負だったが惜しかったな…」

そう言って頭を撫でながら健闘を称えてくれたからでそれを見た子達が僕も、私もって集まり始めたんだけど…

先生達も

「彼のお陰で例年に比べて皆真剣に取り組んでくるから盛り上がってる」

そう話し合ってるし父兄も喜んでいたし叶うなら来年は来賓として招きたいとＰＴＡからも上がっているとかでナゼか私に説得要請が来ている

まぁ、来年も未だ弟はこの学校に通うハズたから当然の成り行きかもしれないけど順当に志望校に受かれば受彼ば東京に行くんですよ？

とは言いたい…

まぁ、四月に発表される年間予定を早めに伝えておけばそれほどは問題ないって思うけどな…
さすが平日の講義休んでまでとは言えないけど土曜日ならある程度前もって予定を組んでれば大丈夫なはず…
「受験の結果次第で東京に行きますしその場合アルバイトをする可能性も有るって聞いてますから私にはなんとも…
勿論お願いはしますけど確約はできませんよ?」
そう言って溜め息を吐く私です
楽しいお弁当タイムは彩り鮮やかな先輩の手作りのお弁当を見て写メる人が多くてしばらくお預けに…
小町ちゃんのブログの影響力のスゴさを改めて実感しましたね
午後からの競技も特にトラブルもなく順調に進み僅差で弟の所属する白組が勝利しました
こうして盛り上がった運動会も無事に終了して校長閉会式の挨拶をしている
私の隣では話を聞かずに八幡先輩に二週間後の体育祭の再確認をとっている妹に
「先生のお話しを聞くように」
そう言ったら何か言い返そうとする妹を見て
「その話は後でもできるから今は話を聞こう」
そう言われて渋々黙り込む妹と私達の小声のやり取りを周りで雑談していた人達も苦笑いを浮かべておしゃべり止めそれが広まり客席の雑談も止めてしまうその影響力は計り知れないですね?八幡先輩
帰る時には多くの子達から
『11月の学習発表会も観に来てっ!』
と、声をかけられてましたね…
妹も体育祭の約束を再確認を取り満足そうな笑顔を浮かべ先輩は苦笑いしてるしお母さんのにやにや笑いで私を見てるのがちょっとね…
そう思いながら先輩を夕飯に招待しようと思う私だった

トリック・ア・トリート…お菓子くれないとイタズラしちゃうぞ?～はーちゃん、けーちゃんのお兄ちゃんになってよっ!?けーちゃん編

トリック・ア・トリート…はーちゃん…けーちゃんのお兄ちゃんになってね～けーちゃん編
「とりっくあとりあーとっ♪はーちゃん、お菓子くれないとイタズラしちゃうよぉ～っ!」
足元からの声に見下ろすとけーちゃんが袋を広げて期待の眼差しで見ている
俺は俺の担当のカボチャのカップケーキを手渡すと
「良かったな、けーちゃん…このカップケーキは数量限定でなくなり次第パンプキンクッキーに変わっちゃうんだからな」
そう笑顔で教えていると今度はルミルミが現れてお約束の
「トリックア・トリート、お菓子くれなきゃいたずらしちゃうゾッ♪」
そう言ってきたからカップケーキを進呈したらけーちゃんと並んで只今実食中
そして三人目に訪れたのは三河さん家の千春くん
と、順調にカップケーキは減っていく
と、言うよりこの部屋にカップケーキが有るって情報が流れてるらしくみるみる減っていくカップケーキ
「ｔｒｉｃｋ・ア・トリート」
けーちゃんと同じ年くらいの女の子で
「はいどうぞ…良かったな、これが最後のカップケーキだ」
そう言ってケーキを渡すと遅れてきた数人が
「え～っ!」
と、声を上げるが結果は…現実は常に無情で優しくない
がっかりしながらも俺のスタンプを貰い他のブースに向かう参加

者達の背中を見送りながら
「ここにカップケーキが有るって噂が流れ始めたくらいから人が増えてきたな…
多分、俺のブースが一番先に切れそうな勢いだ」
そう俺が考えている通りにしばらくするとクッキーはなくなり後片付けをしていると
「はーちゃん、はーちゃんっ！」
俺の名をそう呼ぶけーちゃんの声が聞こえてきた
辺りを見回すとけーちゃんは窓の外にいた
つまり目標のスタンプ１０個を集め終えたって訳だが窓を開けて
「危ないからベランダに出てちゃダメだろ？けーちゃん…」
そう言って抱き上げると室内に招き入れると
「ねえねえはーちゃん、はーちゃんにお願いがあるのけーちゃんのお兄ちゃんになってほしいんだけどダメ？」
幼女の上目使いでそんな事を言われて焦る俺に更なるピンチ、沙希まで来てしまったのだ
「けーちゃん来て…「さーちゃから頼んでよ、はーちゃんにけーちゃんのお兄ちゃんになってってっ！」」
いきなりそんな事を言われた沙希も目を白黒させているから
『なんて言えば良いんだよ？』
そう視線で問い掛けると苦笑いの沙希が
「諦めな、アタシは説得失敗したんだからさ…」
そんな事を言われてしまい困惑していると
「はーちゃんはさーちゃん嫌いなの？さーちゃんと仲良しになれないの？」
そんな事を言われたから溜め息を吐いて
「けーちゃんのお兄ちゃんになっても良いがそれ以上はいまはわからないぞ？
けーちゃんよりは大きくても俺は未々子供で未だ先の事はわからないんだからな？」
そう言ってけーちゃんの手を取るとあまり納得してなさそうだが

沙希もけーちゃんの手を取り取り敢えず次のパンプキンケーキ作りの準備に向かい沙希は自分の担当エリアに戻っていった

が、それにしても誰があんなことけーちゃんに教えたんだよ？全く…

トリック・ア・トリート…お菓子くれないとイタズラしちゃうぞ？…私が彼にしたいイタズラ～ルミルミ編

トリックアトリート…私が彼にしたいイタズラ～ルミルルート編
今日はハロウィンパーティーの日で、受験生の八幡達三年生は直接企画には関わってないけど
八幡の後を継いだ新部長の一色いろはって人や二年目の総武の生徒会長の三河さん率いる二期目の生徒会や海浜の新生生徒会役員役員達
その人達の努力により開催されるこのイベントに私も招かれている
お菓子作りと仮装パーティーで楽しむって話なんだけど…八幡忙しいのかな？私と二人だけの時間って全然取れないのかな…取れないのかな？
って、そんなことばかり考えてるな…最近の私
やっぱり今は未だハンデにしかならない年の差
『学年が違ったって貴女は八幡と一緒の学校に通えてるでしょ？』

思わずそう言いたくなる私はこの現実が切ないしだからこそこういった機会が私にとっては重要なイベントになる…らしい
そうお母さんがそう言ってた
だから私は今日のこの時間を大切にしたい
ハロウィンパーティーだからスタッフはみんな仮装してる
八幡はドラキュラで小町は魔法使い？（ナゼかブラマジガールです）に京華のお姉さんはマジに魔女って感じで兄貴は狼男って感じ
前半のゲームじゃ八幡の手作りカップケーキを確保し後半は八幡のテーブルでパンプキンケーキを一緒に作って試食したりと楽しかった

そしてイベントは終わり、後片付けを始めた八幡達を見ながらあらためて思う
『こうして、八幡達が影で頑張ってくれてるから八幡達のイベントは楽しいんだ…
そう言えば私も劇の稽古を一生懸命にしたっけ…』よ
思いがけない再会を果たしたあのクリスマスのイベントを思い出していた
「私にだってできる事を手伝わせてほしいのに…」
そう呟いていたら八幡が私の側にきて
「元気無いな？なんか悩みごとか？」
そう聞いてきたから
「八幡が私の事を頼ってくれないから…私にだってできる手伝わせてよ？飾りつけくらい…」
そう言ってると八幡は
「あぁ、すまん…今回から俺ら三年は当日以外ノータッチだったからその気が有るならクリスマスを手伝ってやってくれ」
そう言われてむくれていると苦笑いの八幡が
「東京の大学に行くつもりだから春になったらますます会えなくなるんだぞ？」
その忘れていた現実を言われて
「どうしても東京に行くの？」
そう私が聞くと
「雪ノ下じゃないが、世の中を変えようと思ったら力が要るからなできるかはわからんが俺らみたいに泣かされるヤツを減らしたいからそんな事できる立場の人間になりたいんだよ
だからな、まずは学歴って言う肩書きをてにいれるつもりだからT大目指してる…むぐ」
八幡の言葉が途切れた
正確には私の口が八幡の口を塞いでいた
そう、これが私が八幡に仕掛けたいイタズラだった

お菓子関係無くね
これで、私の事を子供扱いやめてくれたら良いんだけどな…

トリック・ア・トリアート…小町のお願い聞いてよお兄ちゃん～小町編

トリック・ア・トリアート…小町のお願い聞いてよお兄ちゃん～小町編

さすがにこのイベントでお兄ちゃんと同じブースの担当は難しいか…

ハロウィンイベント当日の今日は朝から溜め息ばかりついてる

そんな小町を心配してくれてるのはわかるけど大志君が鬱陶しく思えて仕方無い

前はそんな事は無かったのに…小町の誕生日に大志くんを認める発言をするようになってからだ

小町が大志君と距離を取るようになったのは

今までなら、男の子が小町の側に近寄るとスゴい剣幕で怒ってたお兄ちゃんが大志君に限っては解禁してしまったから小町はどう対応したら良いのかわからない

もちろん、大志君が嫌いじゃない

良いお友達だって思っているけど…お友達、なんだよね…小町の中ではさ

大志君が小町に向ける感情はわかるけど、それと同じ感情を小町は大志君に向けることはできない

だって小町が好きなのは……だから少なくとも今は未だ大志君の気持ちには応えられない

こんな中途半端な状態で大志君とは付き合えない

そんな事はお兄ちゃんが好きって言う偽りの無い想いを…自分の気持ちを裏切ることに他ならないのだから絶対にしたくないし大志くんにも失礼な事だから

そんな事くらい言われなくたってわかってるから今は余計に大志君の優しさがウザい

『お願いだから放っておいて』

そう、叫びたくなることが最近は少なくないから気を付けている
そう思っていたら
「今日は親父と母ちゃんも遅いからたまにゃ二人でどっかで食って帰るか？」
後片付けをしている小町にお兄ちゃんがそう言ってくれたのが嬉しくて一気にテンションが上がりましたよ、現金なものでそれだけて心が軽くなりました
お兄ちゃんが連れて行ってくれたお店はハロウィンに相応しいセット料理が用意されていた
かポチャのスープとカボチャのサラダにカボチャのコロッケとカボチャのグラタンにカボチャプリントまさにカボチャ尽くし
「最近、調子悪そうだな…小町？俺じゃ、頼りないだろうけど話せる事なら一度話してみてくれ」
そう言ってくれたのは嬉しいけどさすがにこれだけは自分自身でケリを着けなきゃダメなことだからね
もう少し自分自身で考えてみるよ、お兄ちゃん」
そう言って〝お兄ちゃん〟を強調して答えた小町達は血の繋がった兄妹何だからって自分自身に言い聞かせるためになんとか笑ってみた…
けど、上手に笑えてれば良いんだけど自信ないよ…お兄ちゃん
お兄ちゃんを好きになっちゃった小町が悪いのか…それとも、お兄ちゃんと小町が兄妹なのが間違っているのだろうか？
そんなの難しすぎて小町にはわかんないよ…
春になったら東京に出ていくつもりのお兄ちゃん…
そうなったら、今みたいにいつも会えるのが当たり前じゃなくなっちゃうんだよ？
そう、言いたいけどどのみち高校出たらお父さんに家からは追い出されるんだろうからあまり変わらないのかもしれない
だけど…それでも千葉市内…せめて同じ千葉県内ならって思っちゃうのは仕方ないと思う、仕方無いよね？
食事が済んで、レストランからの帰り道…

アタシの指定席であるお兄ちゃんの自転車の荷台に座りながら、お兄ちゃんにしがみ着きながらそんなことを考えていた

年が明けたら自由登校の三年生…お兄ちゃんが登校するのは考えにくいからね

そう思うとお兄ちゃんと一緒に学校に通えるのももう後2ヶ月しかないんだな？

って考えたら泣きたくなってきた…もちろん我慢したけど

春が…春が来るのが恨めしい

「お兄ちゃんクリスマスケーキは何にする？」

私は哀しみを誤魔化す為、関係のない話をしながらお兄ちゃんにしがみ付いてお兄ちゃんの背中の温もりを感じていた…そんな夜だった

バレンタインデーキス

試験が終わり暫くは勉強なんぞしたくねえよっ！
と、言いながら川崎家で料理の勉強会をしている俺は間違っているのかもしれない
日によって金居さんや優美子に海老名さん、陽乃さんも参加するが雪ノ下家で開き…
そんな日は蒼空とけーちゃんのお迎えは都築さんが喜んで行ってくれた
そしてバレンタインのイベント当日ケーキを提供したいと申し出てくれた
今年はホットチョコカフェを開催しほっぺにキスをしたカップルにはチョコケーキのサービスもある
ちなみにココアは専門ではないが俺のマッカン好きが影響したのかマッカンの売り上げが前年を上回り今回試しにココアを提供してみようと言うことになり申し出があったそうだ
大手メーカーの協賛によりケーキの提供したいと申し出が何件か有り協力をお願いしたそうで最後までケーキが絶える事はなかった
頑張ってイベントを盛り上げた奉仕部と家庭科クラブに両校の生徒会執行部となんとか様になってきた海浜の家庭科クラブのメンバー達にマシュマロを落としたココアを振る舞うと
「しまった、これを忘れていましたねっ！」
そう言って小町が嘆くと
「本当に、私も知っていたけど… 忘れていたんじゃ意味がないよ、小町ちゃん…」
そう言っていろはも苦笑いしている
そして… 小町は大志、折本は玉縄、海老名さんは戸部の頬に各々がキスを交わしケーキを手にして仲良く食べている
俺はけーちゃんでいろはは蒼空と彩加は留美とケーキを食べているが後の女子達は女子同士で… と、それのみを語っておこう… っ

て誰に？
　そしてバレンタインデー当日は雪ノ下家に招かれてチョコフォンデューパーティーを開いてくれて皆で楽しんだのはこれが高校生活最後のイベントになるんだな…
　と、染々思ったものだ
　その帰り際に皆から渡された想いの詰まったチョコを見ながらホワイトデー…いや、卒業式までには一応のケジメを着けたいと思っている
　場合によっては東京行く俺と、千葉に残る彼女と離れる事になるんだからな…
　せめて新学期までには何度かデート位はしておかないと申し訳ない気がする
　奉仕部に入れられたあの日以降の思い出達…　それが次から次へと甦ってくる追憶に浸りながら家に帰り風呂の中でもひたすら考えたがそんな簡単に答えが見えるならとっくに答えを出していたんだろうからな
　このセンター試験より難問の答えを俺はどう読み解か答えを導き出すのだろうか？
　残りの日々でしっかり考えないと、チョコをくれた皆にも失礼だからな
　卒業式迄後１４日…